

保存

春嶽公記念文庫解説目録

— 什器編 —



# 春嶽公記念文庫解説目録

— 什器編 —

福井市立郷土歴史博物館編

## はじめに

昭和四十五年十二月、松平永芳氏（現福井市立郷土歴史博物館長）の申出により、松平家の「春嶽公記念文庫」は福井市に寄贈され、「福井市春嶽公記念文庫」が誕生した。文庫は、市条例によって、その呼称を踏襲して永久に保存すると共に、学術、文化、教育等のために有効に活用する旨約束された。

右約束に基き、文庫の内容を明らかにして、研究、利用者等の便宜を計ろうと、去る四十七年三月、記念文庫解説目録―文書編―を発刊、内外学界に多少なりとも寄与することが出来た。

右に引続いて、関係者一同、什器編の編纂に力を注いだ結果、此の度、その完成を見るに至ったことは、よろこびに堪えない。これ等両目録により、文庫の全貌を理解して頂ければ幸いである。

最後に御断わりして置きたいことは、什器編とは言っても、春嶽公の性格から、その内容は極めて地味なもので、由緒はあっても、骨董的価値の高い品は極めて少ないと言ふこと、更に又、全部が全部春嶽公の手沢品、所藏品ではなく、一部は、大正六年、春嶽公記念文庫設立後に、有志各位が同文庫に寄贈された若越関係郷土史料も含まれていると言うことである。

昭和四十九年三月

福井市教育委員会

## 凡 例

- 一、本解説目録は「福井市春嶽公記念文庫」の史資料を文書、什器の二類に大別し、その内の「什器」の部を更に一、肖像。二、書籍。三、絵画。四、拝領品。五、武具。六、日常手沢品。七、諸道具の七項目に細分してある。
- 一、各区分中には適宜人物別に分類した箇所がある。
- 一、本目録の記載順は、名称、員数、解説とし、解説欄は作者（著、編、筆者名を含む）・材質・法量の順に記し、必要に応じて箱書・由緒書などを「」を付して原文のまま引用、更に（ ）を付して内容、人物解説などを加えてある。
- 一、法量は普通一〇×一七などと縦・横の順に厘単位で示したが、立体については高さ、口径等、その都度部位の名称を記入してある。
- 一、「」内には、箱書・由緒書などの外に史資料の本文、例えば七絶書幅であれば、その七言絶句自体を記載した箇所もある。
- 一、人物解説は史上高名な人物、例えば徳川慶喜・西郷隆盛等はこれを省き、郷土越前関係人の紹介を主眼として簡略に解説してある。
- 一、本文庫は松平春嶽公の遺品を中心とするものであるから、四、拝領品。六、日常手沢品。七、諸道具の三項目は特に註記のあるもの以外は、すべて春嶽公所用の什器である。

## 参 考 註 記

「春嶽公記念文庫」について

安政五年七月（一八五八年）、時の大老井伊直弼と政治上の意見を異にした福井第十六代藩主春嶽松平慶永公は、幕命によって隠居謹慎を命ぜられ、藩主の座を退いた。

代って大老の推した糸魚川松平家の直廉公が養嗣子として迎えられ、第十七代藩主松平茂昭公となった。

尚、第十八代康莊、十九代康昌両氏を経て現当主は宗紀氏であるが、これが福井松平家の家系である。

これより先、明治十五年に隠居たる春嶽公の実子として誕生した松平慶民氏は、既に福井松平家の後継者が確立して久しいから、改めて自分が本家を相続する必要なしと、十八代康莊氏の順養子として本家の相続人として立する大勢を固辞して、明治末期に、別に一家を創立して独立した。

これがため松平本家に於ては、春嶽公の遺命にもとづき、公の遺文、遺品、拝領、受贈品等、公一代限りの物件一切を慶民氏の手に移管し、その保護、継承を託した。

ここに於て氏は、大正六年、東京麻布の邸内に「春嶽公記念文庫」を創設し、その父君である公を中心とした維新史料を後世子孫の為に積極的に整理保存することと、明治四十四年に文部省内に設置された「維新史料編纂会」の編纂事業を側面から支援することに努力を傾注し、多大の成果を収めて昭和二十三年に他界した。

その嗣子永芳氏（現郷土歴史博物館長）は、第二代文庫主として、戦後の混乱時代に於ても収蔵品を散佚することなく、よくこれ等の保護につとめ、昭和二十八年福井市立郷土歴史館が創立されるや、その一部を更に、四十二年以降はその大半を寄託し、四十五年館付属の史料収蔵庫が完成するに及んで右文庫を福井市に寄贈した。

福井市に於ては、文庫名を踏襲し、これを永久に保存し、学術、文化、教育の資として活用する旨を市条例により決定し、ここに「福井市春嶽公記念文庫」が誕生した。

以上が文庫の概要であるが、まことに遺憾なことは、大東亜戦争末期に、福井の安全を期待して東京から福井神社宝物館に疎開された文庫収蔵品の一部が、かえって戦火により烏有に帰したことである。

## 目次

|         |       |
|---------|-------|
| 一、肖像    | 一～四   |
| 二、書蹟    | 五～三四  |
| 三、絵画    | 三五～四二 |
| 四、拝領品   | 四三～四八 |
| 五、武器    | 四九～五四 |
| 六、日常手沢品 | 五五～六〇 |
| 七、諸道具   | 六一～六八 |

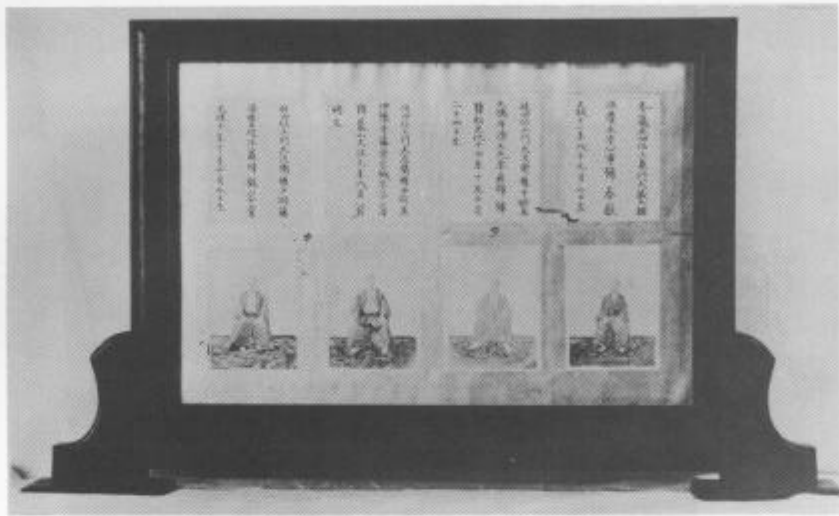
### 〔表紙図案解説〕

表裏表紙の葵紋は、松平春嶽所用の刀装具、甲冑等、武器類から転写したものである。

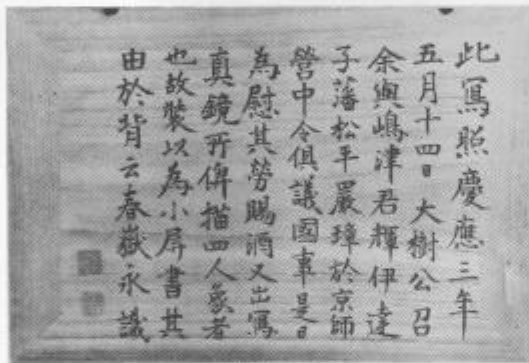
肖  
像



松平春嶽油彩肖像画



四老公肖像写真衝立



同 衝立裏書

同 松平春嶽肖像部分







横井小楠肖像版画

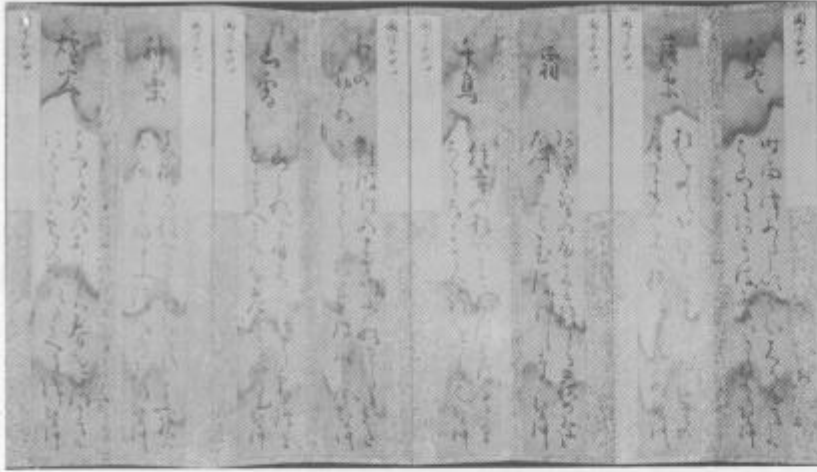


中根雪江肖像写真



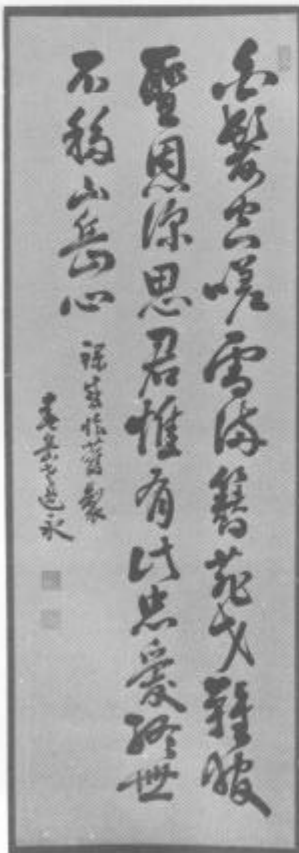
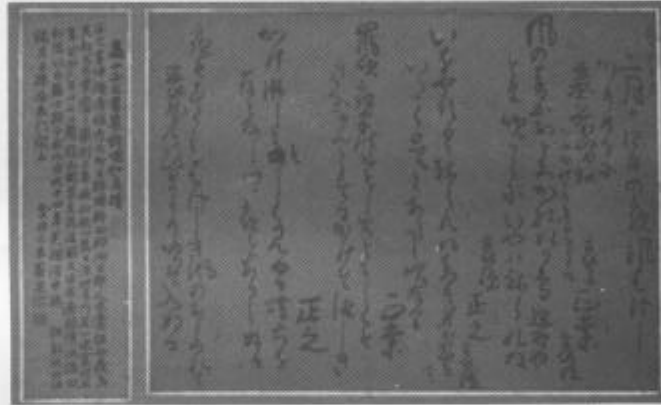
書 蹟

寛恭君詠御親筆歌集

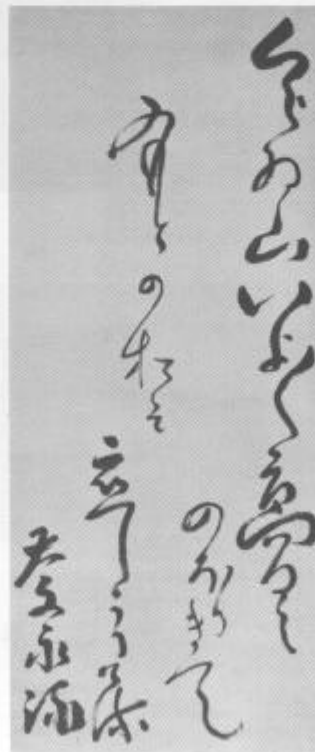


契冲短冊折本

高山彦九郎書幅

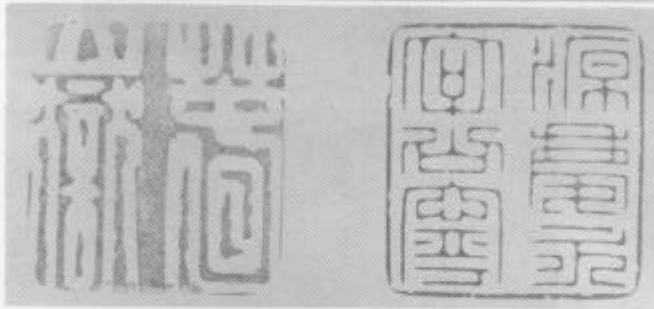
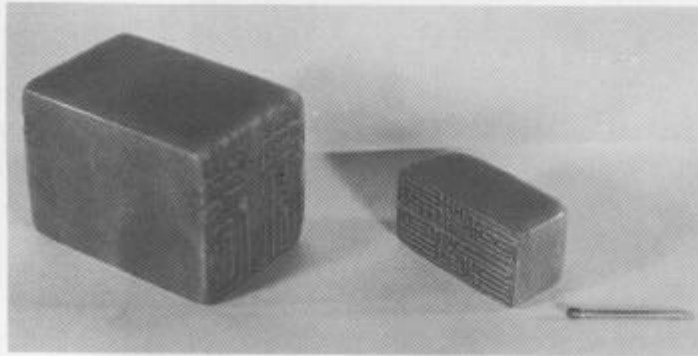


松平春嶽書幅



松平春嶽和歌幅

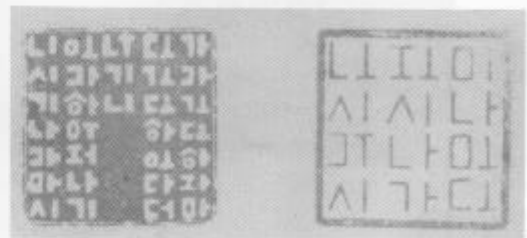
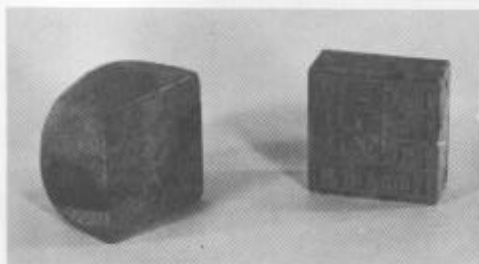
松平春嶽所用印



河崎致高刻

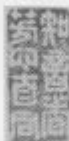
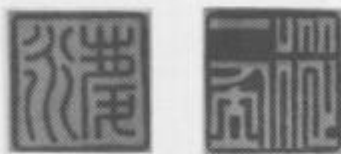
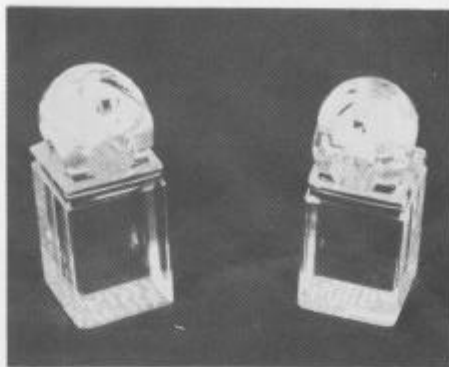


山内容堂刻



神代文字の印

松平春嶽所用印



雪才松柏金多。枝植綱常在此行天。心久美  
 藝勝潔人間何獨伯夷清義高便覺生居陰  
 礼重方知死甚輕南。八男兒終不辱白皇天上  
 帝眼分明

戊午之冬橋本中記

橋本左内書幅

惟公克己三句神三難也  
 身角巾。退令新四佛  
 里數日如。名水多親  
 次。主。法。法。本。多。日。所。發。也。  
 筆自

中根雪江書

中根雪江書幅

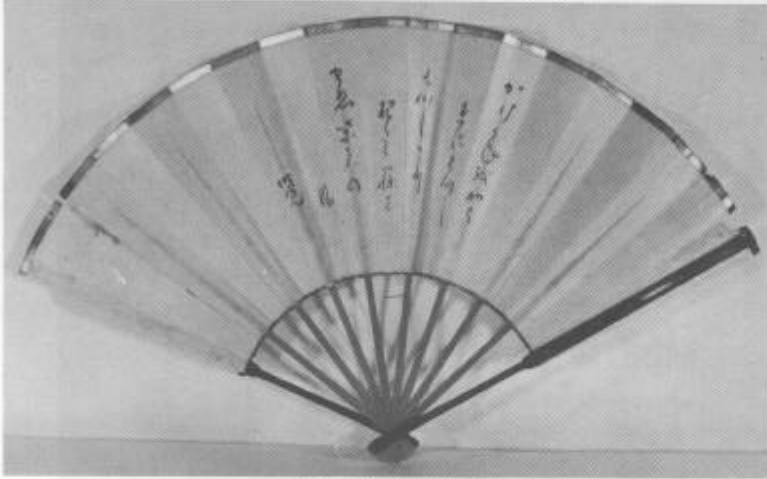
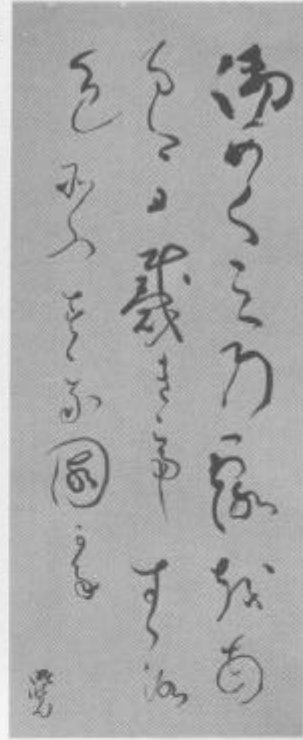
橋本左内旧藏 岳飛筆扁額

岳飛 寶 匾

佐久間象山書幅

秋曰香之遠堤柳徑更深小  
 亭帳野岸清漪宜倚臨  
 妻。出。水。草。福。眠。少。禽。自  
 惟幽靜情何淡思華著味  
 丙像前桐浮煙分遠寒空  
 戶合秋氣水空珠潔沈浪風雨  
 傾河鄰雷動山陰野水淺  
 潭。濤。珠。淋。川。谷。元。冲。虛  
 借周又何心達人奇榮屬對  
 披葉謀寄接滄浪客鳴  
 雁。時。未。寄  
 年首。日。為。竹。村。子。題。出。水  
 畫

橘曙寛和歌幅



橘曙寛扇面和歌

徳川慶喜書幅



徳川斉昭書幅



伊達宗城書幅



鍋島直正書幅

咫尺  
天顏侍 紫宸豈  
恩澤 及冀 襄 疑 只 願  
換羊公 閑弄 富春山  
下春  
出正

間部詮勝書幅

常懷 閑適 我川 涌 喜 色 從 花  
官 貴 隨 可 在 日 中 迹 法 良  
有 善 多 至 一 言 時 時 處 未 野 亦 矣 矣

小笠原長守書幅

歌管聲停月已低 花深  
人靜九重閨 巫山夢恨天  
明早一轉流鶯御柳西  
宮鶯喚曉近製 化堂草

岩瀬忠震書幅

海 既 任 只 許  
碧 翁 知 五 州 何 謂  
遠 至 亦 一 男 兒  
巖 瀨 忠 震 書



伊藤博文書幅

曝骨刑場吾不及存心社稷  
 與君同追懷往事感何限落  
 木秋風苦雨中

吊橋本景藏先生墓  
 後學伊藤博文

平生以爲多相所至公心之類  
 少能治安室廣恩者以勝海舟  
 知之如則于死

予解有三年之付の事に之 勝海舟 不能言也  
 此後及之正事一 齋 正志 遺書  
 九十 八

勝海舟書幅

笠原白翁書幅

而中々之氣を極る 齋 正志 遺書  
 神の心 齋 正志 遺書

太田垣蓮月短冊折本

太田垣蓮月短冊折本

横井小楠書幅

斯道之懷三十年向  
公一日也彼之天人也  
可希反而吾風也其日也  
車和  
其氣也云云  
横井小楠

梁川星巖書幅

新表感物之至知  
繁華後承初之長  
其言不實之轉海一  
其言不實之轉海一  
其言不實之轉海一

吉田東篁書幅

春來春去幾多更數今年四十  
春來春去幾多更數今年四十  
春來春去幾多更數今年四十  
丁未耕年歲年 吉田東篁

西郷隆盛書幅

子之百子孫孫  
思之百子孫孫  
思之百子孫孫  
思之百子孫孫

絵画

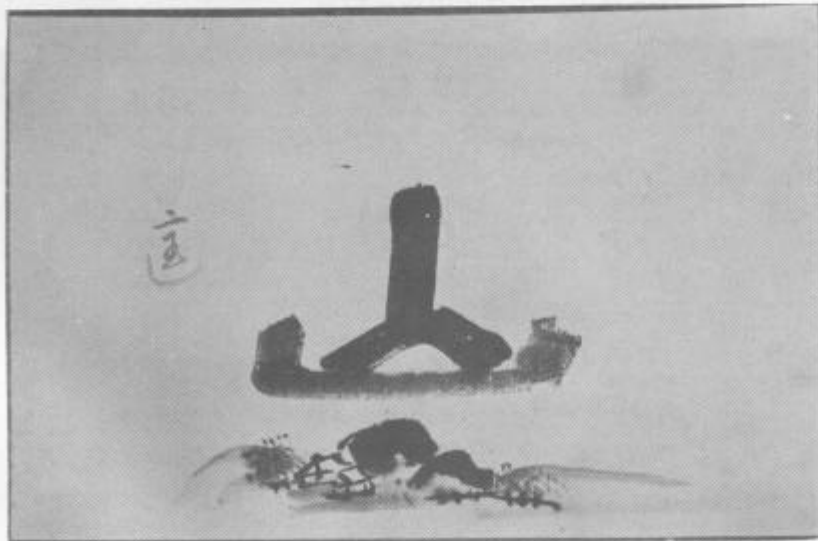
狩野元昭筆 鐘馗図幅

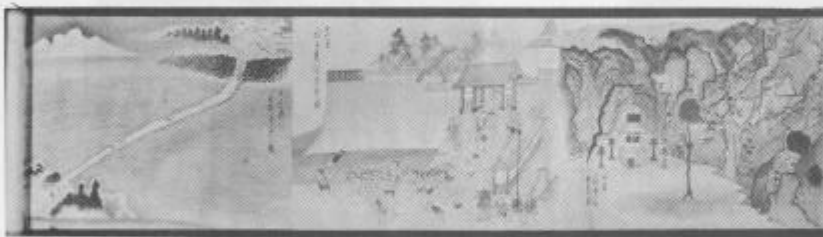


蒔田雲處筆 墨竹画幅



田安斎匡筆 山の字に田舎風景の画幅





福井藩十二ヶ月年中行事絵巻



徳川慶喜 筆油彩風景画

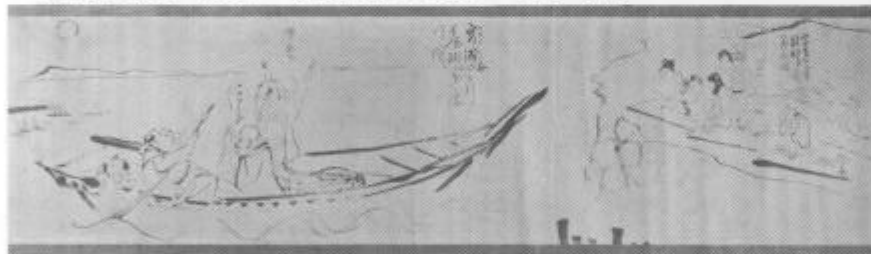


江川坦庵筆 岩竹の図幅

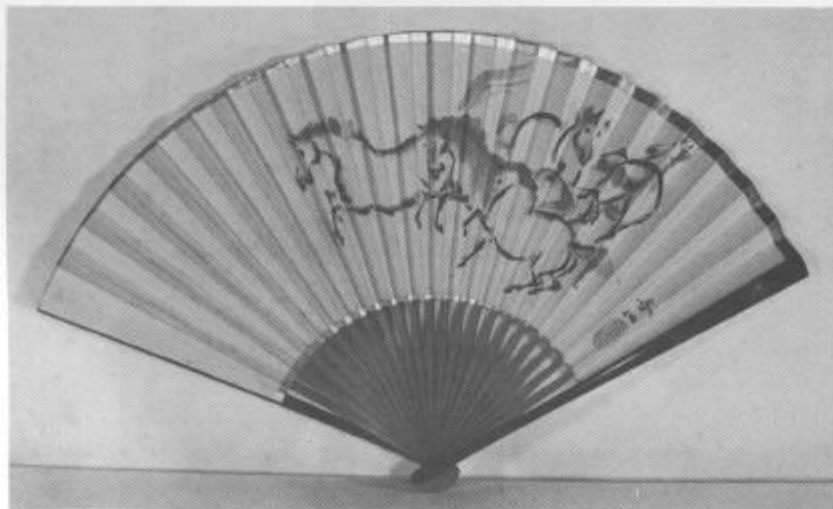


徳川斉昭筆 柿本人麿肖像画

山内容堂筆 戯画「難船ヲ見テ笑フノ図」巻軸



島田墨仙筆 扇面馬図



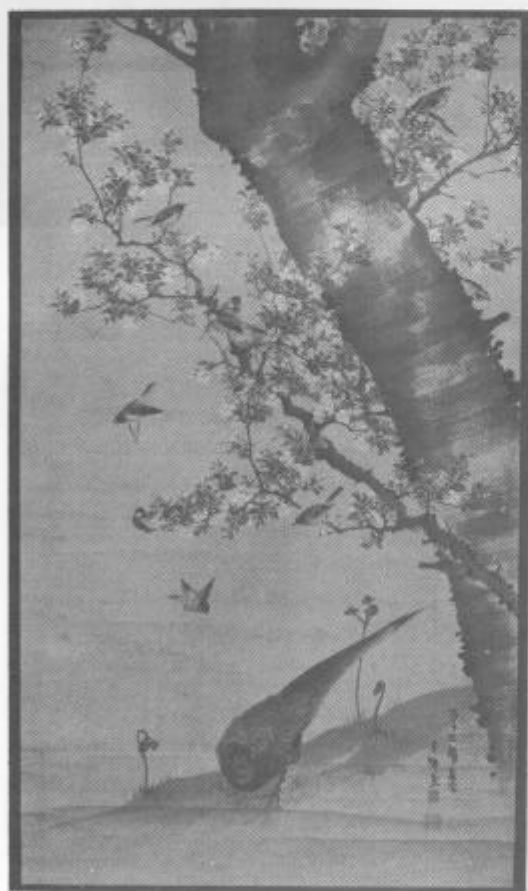
早瀬来山七十九歳の画幅



市川徳行筆 鯉の画幅

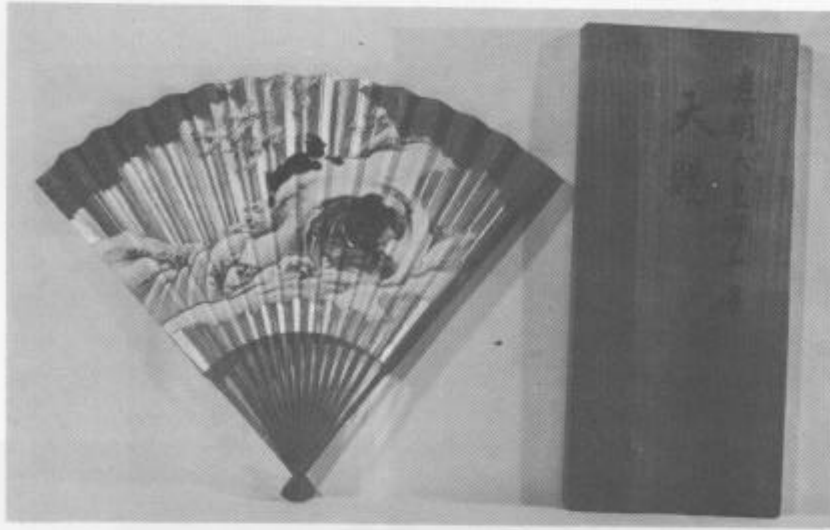


島田雪谷筆 桜花群禽の画幅



拝領品

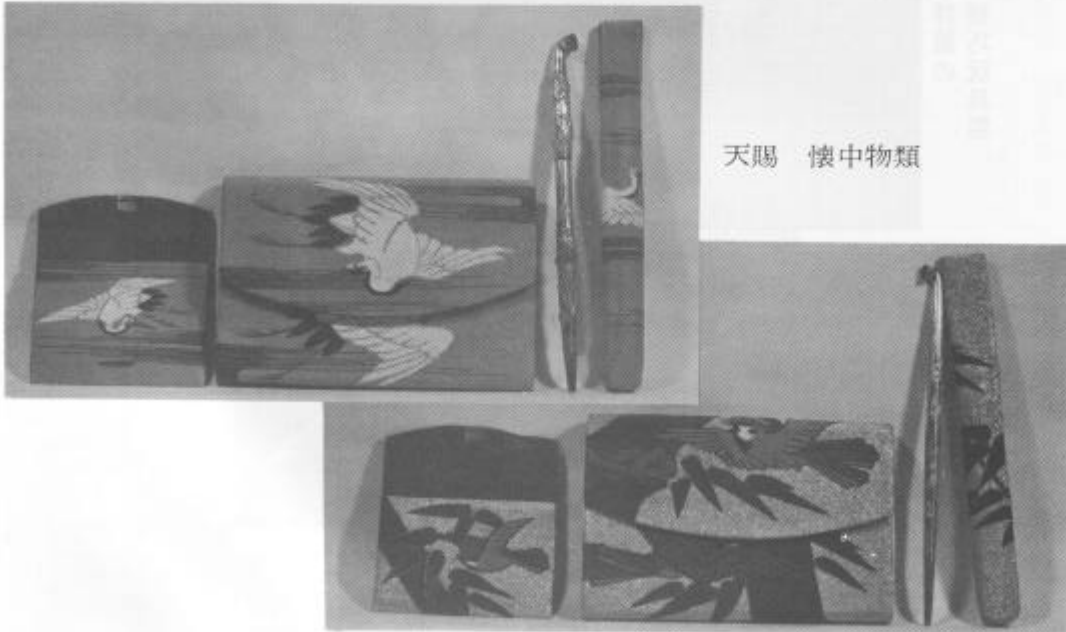
天賜 雪中熊図末広



天賜 宣徳花瓶



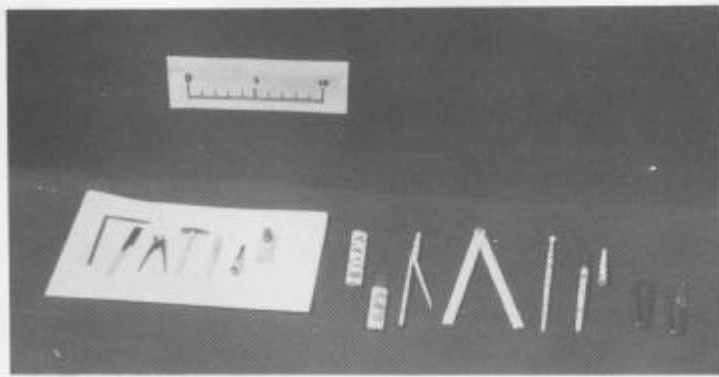
天賜 懐中物類





嘉仁親王より拝領の毛植白馬置物

十二代家慶將軍より拝領の  
銀細工物等 精巧玩具類

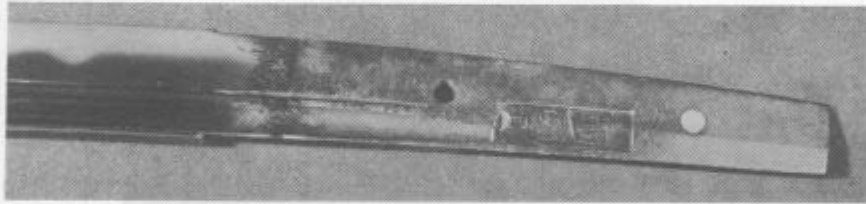
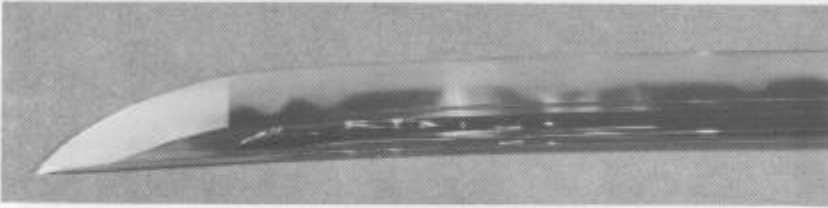




武  
具



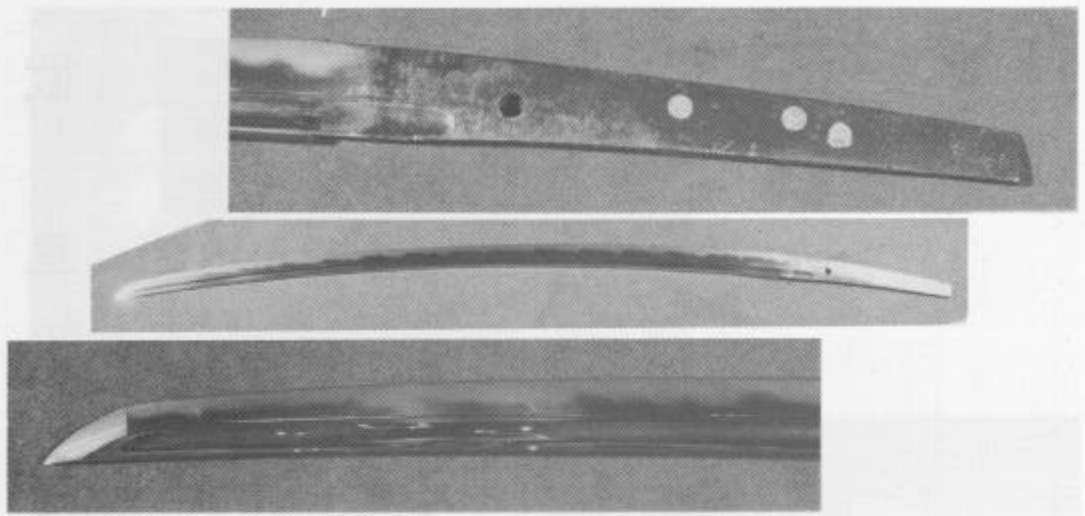
青江恒次



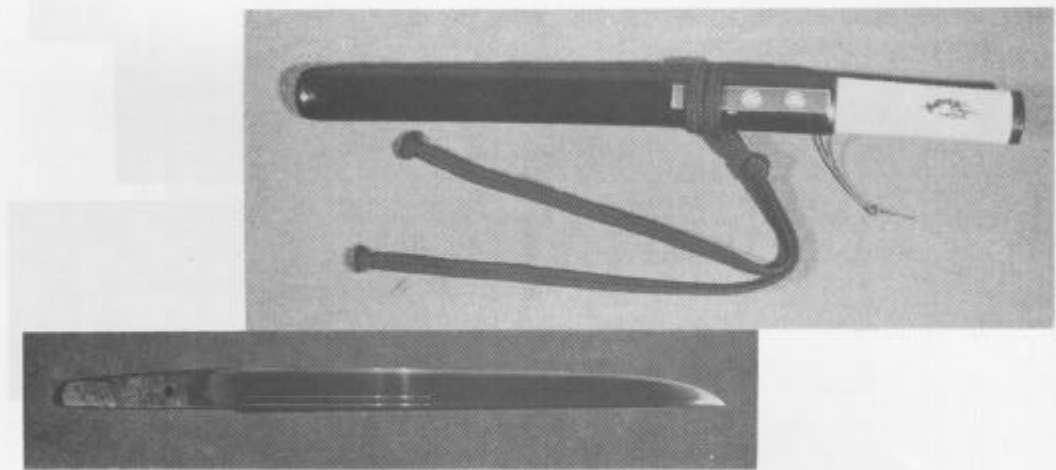
山城国信国



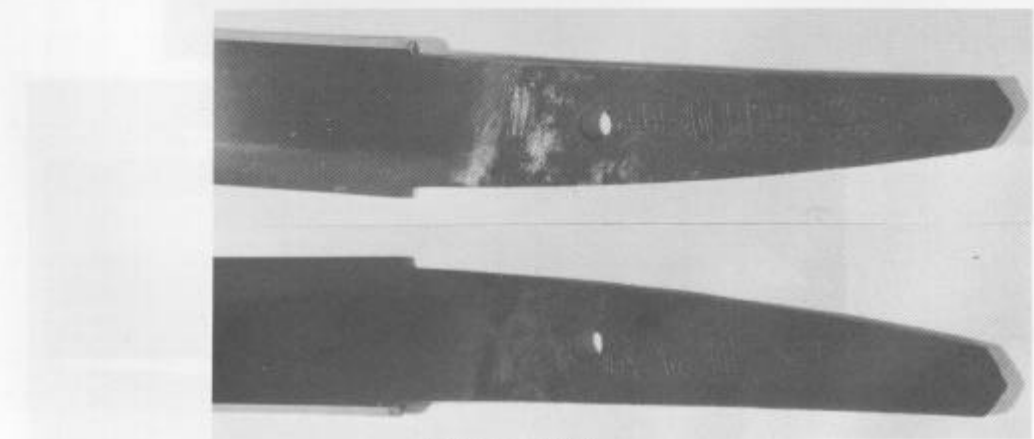
相州広正



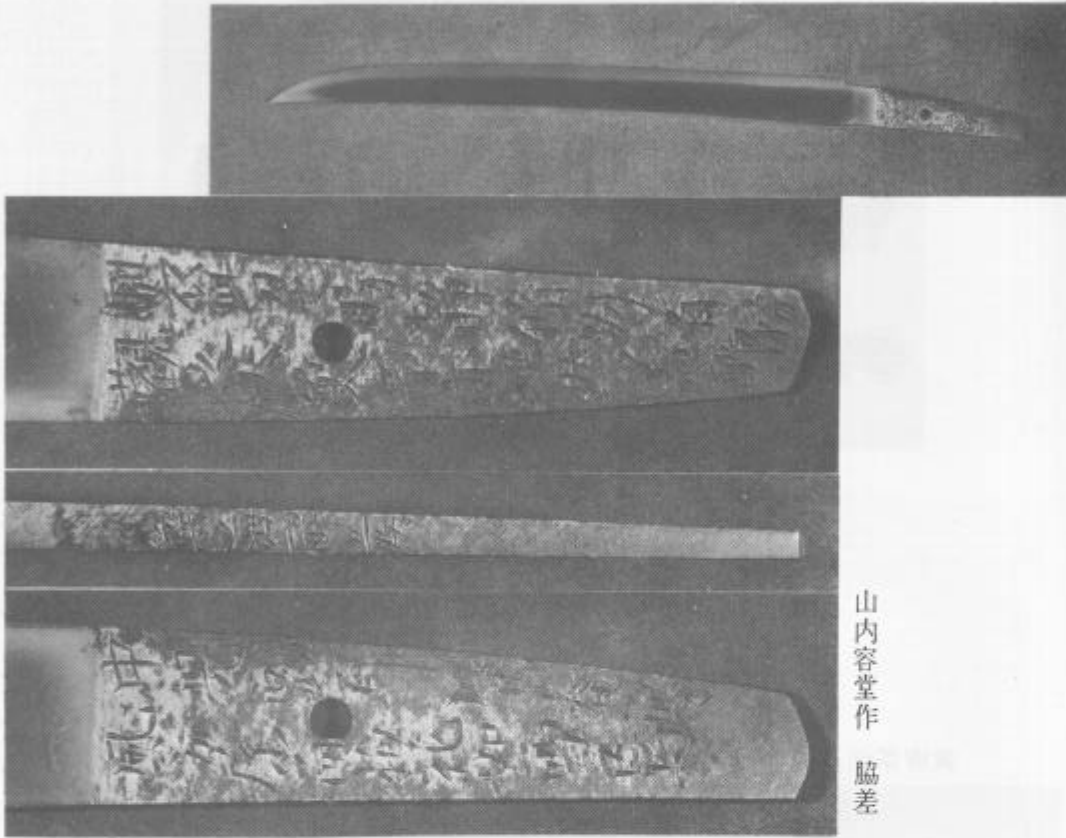
備前康光



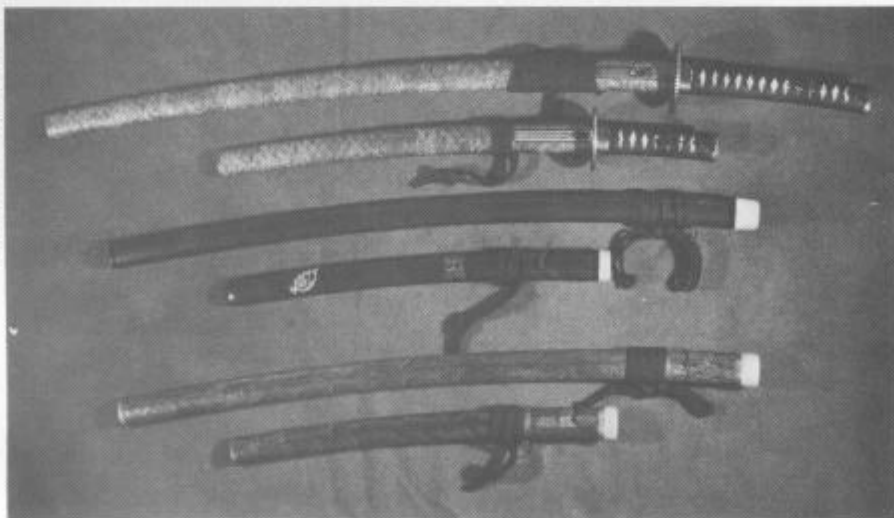
新藤五国光



初代越前康継



山内容堂作 脇差



松平春嶽所用大小拵  
 (信国・広正の拵。上段より鯉皮・石地  
 塗・蛇皮。)



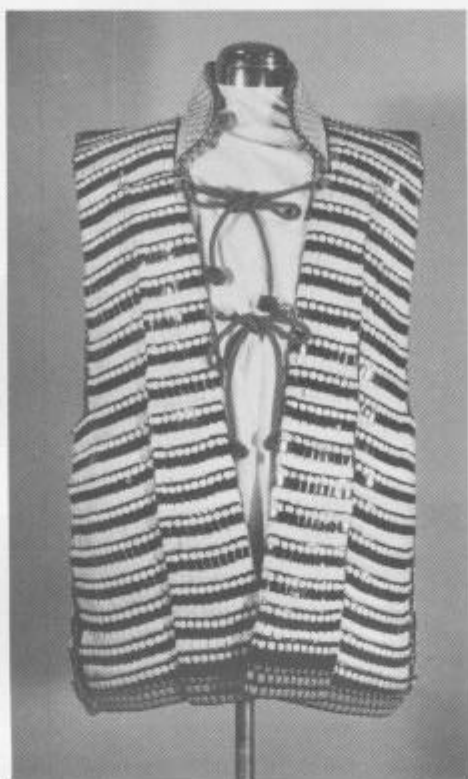
中根雪江所用短刀 銘宗有

黄唐茶色系絨二枚胴具足

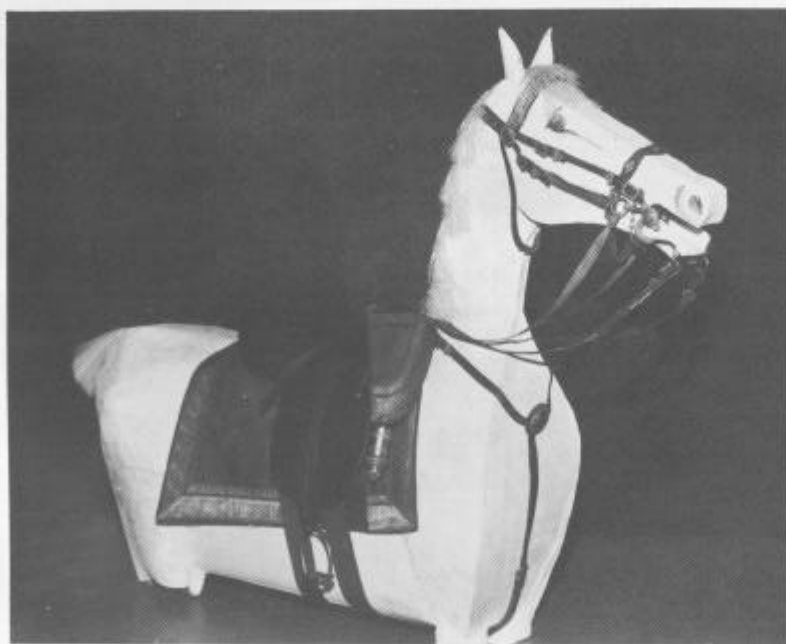


骨牌札疊具足

日常毛糸品



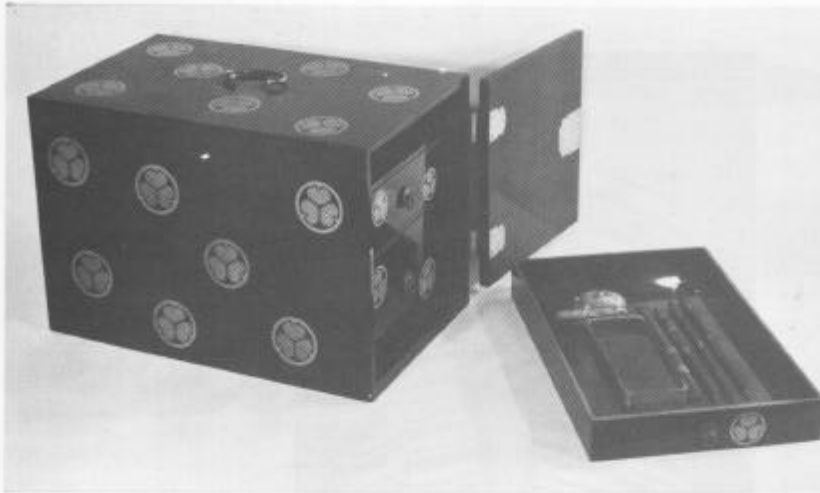
白糸絨陣羽織



仏国製馬具

日常手沢品

黒漆菱紋散提御用箱



洋式蒔絵パイプ

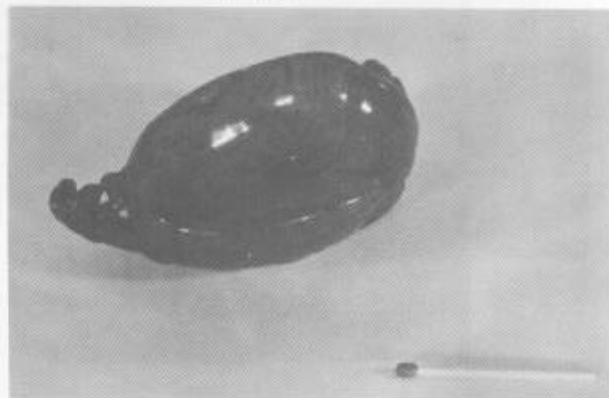


紫檀製金蒔絵小型文台・硯箱

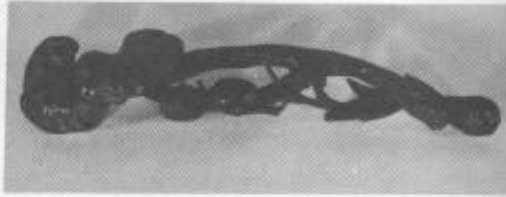
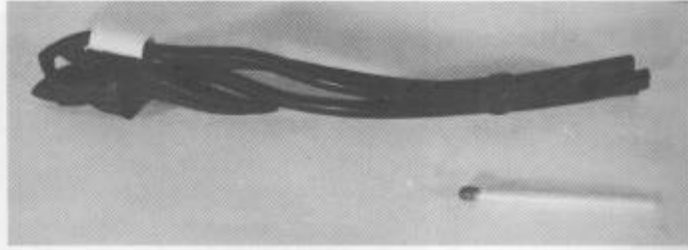


伽羅木製白衣観音線香建

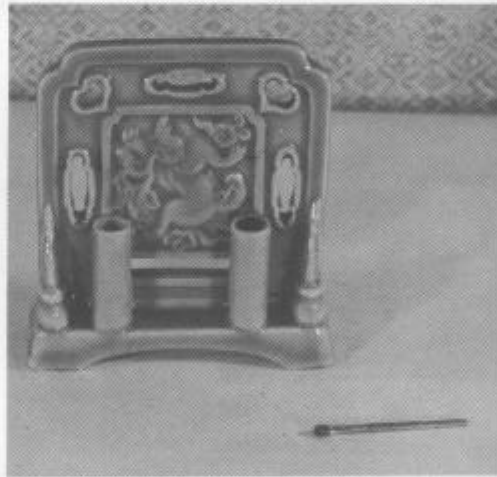
犀角盃



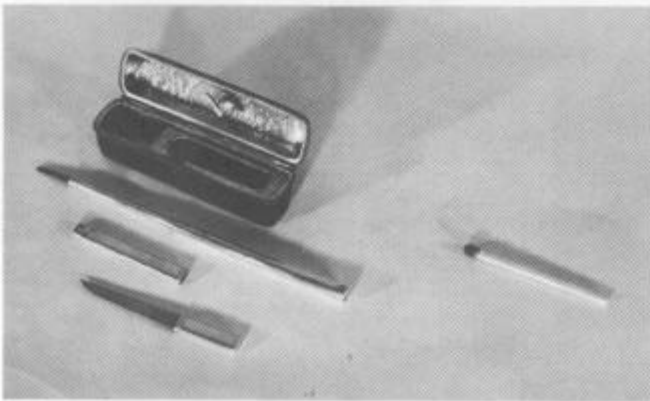
島雪斎刀 筆架類



陶製肉池

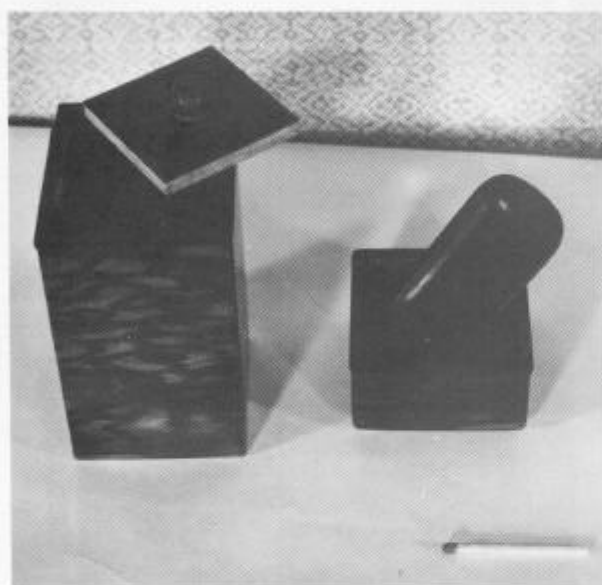


青磁硯屏風



懷中用矢立

椰子の実製水呑



黒柿茶筒並びに茶鉢

象牙製 岩に兎の置物



石製桃置物



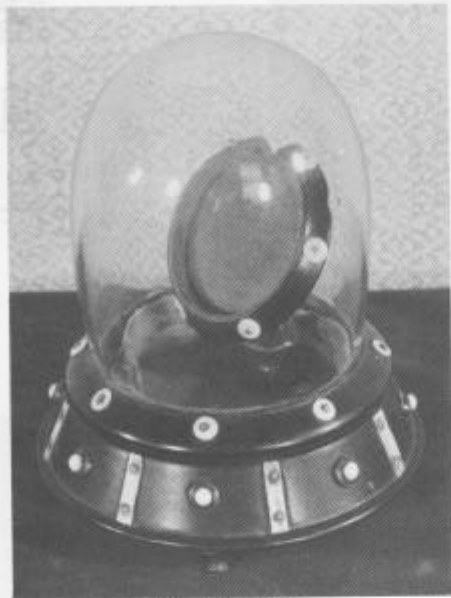
諸道具



島雪斎刀 百老竹置物



橋本左内所用書物挾板



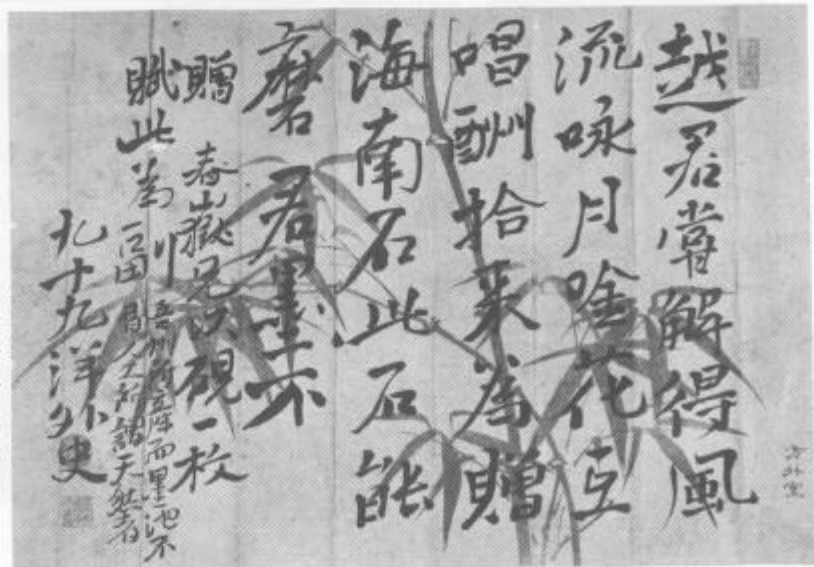
懐中時計掛



松平春嶽所用長上下



山内容堂より松平春嶽に贈った  
自然石硯並びに添書

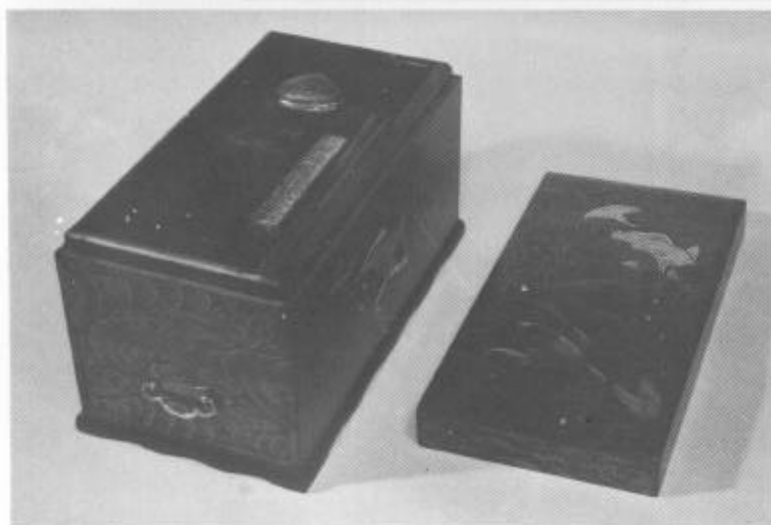




黒漆塗煙草盆



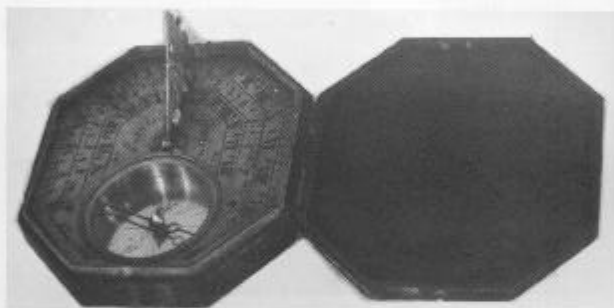
紫檀  
提煙草盆



橋本左内が松平春嶽より拝領  
躍鯉金蒔絵硯箱



芳明作 曆計測器



磁針付正午盤

松平春嶽所用科学器械類



一、肖像

## 一、肖像

### 一、松平春嶽肖像画 一面

佐々木長淳 油彩 七〇×五〇

(画法の心得のあった旧臣佐々木長淳が、春嶽の依頼により写真をもとにして描いたもの。東京佐々木八重子氏より当館に寄託された史料中には、この間の事情を示す左のごとき松平春嶽書翰がある。

「拙者写真ヨリ模シタル油絵兼テ及御依頼置候処、落成ニテ昨日態々来邸被差出一覧候、実ニ可驚好画ニテ満悦之至、不肖努鈍ノ慶永真影ヲ子孫ニ伝フルヤ被汗ニ候ヘトモ、好手ノ名譽ヲ後世ニ示ス、於余本懐ノ至リニ候、不取敢父子厚意ノ忝キヲ真謝スルヲ表スルタメニ参趨ス。

明治十七年十月五日

東照宮八代孫 秀康卿十四代裔 正二位勲二等 松平慶永(印) 佐々木長淳殿 佐々木三六殿

### 一、松平春嶽肖像写真 一葉

二七×二一・五 (正座正面像、紫檀額縁入。)

### 一、松平春嶽夫人勇姫肖像画 一面

佐野常成 油彩 四二・五×三四

(明治十八、九年頃の肖像写真をもとに、明治二十年四月に描かれたもの。勇姫は熊本藩主細川斉護の女、明治二十年一月六日に歿した。)

### 一、四老公肖像写真衝立 一基

横田彦兵衛撮影 衝立寸法 三六・五×五〇・五

衝立裏面松平春嶽自筆由緒書「此写照慶応三年五月十四日大樹公召余與島津君輝、伊達子藩松平殿璋於京師當中令俱議国事、是日為慰其勞賜酒又出写真鏡所傳描四人象者也、故装以為小屏書其由於背云。春嶽永識(印)」

(慶応三年四月、松平春嶽が朝命により上京して山内容堂・島津久光・伊達宗城と共に所謂四侯会議を開

いた際、徳川慶喜が横田彦兵衛に命じて撮影させたものである。のちに春嶽は、これを紫檀製小衝立に仕立てさせ保存した。猶、写真には絵具で彩色が施されている。）

一、松平春嶽夫人勇姫並生母青松院肖像写真 三葉

①勇姫肖像 九・五×八・五（正座正面像）

②勇姫肖像 九・五×一二（山水の屏風を背景にして、琴の前に正座した像。）

③青松院肖像 八・五×九・五（山水の屏風を背景に、剃髪姿で正座した像。いずれも松平春嶽手沢の写真入に収められている。）

一、橋本左内肖像画並小伝 一幅

佐々木長淳画・松平春嶽撰 一一三・五×五六 紙本墨書

（橋本左内歿後十六年を経た明治八年に、橋本家からの依頼により佐々木長淳が記憶をもとに描いた肖像と、同年五月二十一日付の松平春嶽筆橋本左内小伝とを一幅に仕立てたものである。）

長淳は福井藩士として天保元年に生まれ、御製造方頭取役に任じ大小銃砲・火薬・蒸汽船等の製造に当たった。慶応三年四月、兵器購入の命を帯びて米国に出張、維新後は工部省に出仕し活躍した。橋本左内とは親戚である上に年齢も近く、共に蘭学を研究し、常に親しく交わった間柄であった。）

一、中根雪江釣姿肖像写真 一葉

内田九一撮影 一〇・五×六・四

中根雪江自筆裏書「明治二年十一月二十五日 於横浜内田九一製 小照 第十四大区二十六小区宿浦 第三十六番地 松蔭老漁謹上」

（雪江より春嶽に呈上した写真で、後年これを用いて描いた雪江肖像画が、中根家より本館に寄託されている。）

一、中根雪江肖像写真 一葉

一一・一×七・五 中根雪江筆包紙裏書「自題小照 五十九年不食言 風蔭老去鬢霜繁唯嗟恩寵撫所報

小照貽着示子孫 慶応元年臘月念八」

(大正中期、中根家より春嶽公記念文庫に寄贈されたもので、自筆の和歌を背景に帯刀正座した図柄である。)

一、W・E・グリフィス関係写真 四葉

- ① グリフィス肖像 二七・九×一七・八
- ② グリフィス並孫娘カサリン肖像 二七・八×一七・八
- ③ グリフィス並孫息子ファセット肖像 三〇・七×二〇・五
- ④ グリフィス並家族肖像 一九・七×二六

(大正六年、松平慶民が邸内に「春嶽公記念文庫」を創設した直後、在米グリフィス博士から文庫に寄贈されたものである。それぞれ博士自筆の書入れがある。W・E・グリフィスは二八四三年九月米国フィラデルフィアに生まれ、理化学を修める。ラトガース・グラマー・スクールで横井兄弟を始めとする日本人学生と知り合い、また福井範よりの留学生日下部太郎を教え、その優秀さに感歎する。明治三年二十七歳の時、招きに応じ福井藩校明新館の化学及び博物学の教師として来日、一年間福井の青少年に大きな感化を与えた後、大学南校や東京開成校に教鞭をとって明治七年帰米した。日本近代化の黎明期に、我国の人心を覚醒し啓蒙した貢献度は極めて大きかった。帰国後は牧師となり「皇国」等の著述を発表して日本紹介につとめ、一九二八年八十六歳で歿した。)

一、徳川慶喜肖像写真 一葉

九・一×五・八 (グリフィス博士旧蔵。)

一、マジエット肖像写真 一葉

(マジエットは、明治初年グリフィス博士等と明新館教師として招かれた外人教師である。前記徳川慶喜肖像写真と共に、在米のグリフィスから松平慶民に贈ったもの。)

一、徳川慶喜肖像写真 一葉



二三・七×一九・三（維新前撮影のもので、束帯を着けた正座正面像である。一部、絵具を用いて彩色が施されている。）

一、横井小楠銅版画肖像 一葉

二一・二×一三・一 松平春嶽自筆書入「横井小楠先生時平四郎肖像 明治二十二年二月二十三日先生嫡男伊勢時雄所贈ノモノナリ。源慶永識」

（横井小楠の肩衣姿の生前の写真をもとに、嫡男伊勢時雄が製作させ、春嶽に贈ったものである。）

一、書蹟

## 二、書 蹟

### 一、七言絶句 一幅

松平定信 紙本墨書 二二五・四×一一四

### 一、古歌手鏡 一帖

松平定信 紙本墨書 四〇・五×二八・五厚六・五

箱裏書「此御色紙短冊は、そのかみ田安一位の君の御需によって、楽翁少将の君古歌とも書せ給ひしを御衝立に押させ給ひたるか、其後純姫の君の御方に譲り伝へさせ給ひけるを、こたひねむころに乞受給ひて、かくはせしめ給ふになむ 弘化二きのとの巳とし十二月八日」

題箋「楽翁源公真蹟」

（四季の草花を極彩色で描きこんだ色紙十一枚、短冊九枚を折本仕立に表装したもので、それぞれ松平定信自筆の和歌が記されている。本記念文庫蔵品中、最も美しい史料の一つである。）

### 一、和歌 一幅

松平宗矩 紙本墨書 一六×四五・二

（立春・風光日新等と題して、六首の和歌を列記している。筆者の松平宗矩は、正徳五年福井藩祖結城秀康の曾孫松平知清の子として江戸に生まれ、九代福井藩主宗昌の養子となり、宗昌の逝去後享保九年福井十代藩主となる。在任中、領内には天災地変が相次いで財政は窮乏し、飢餓に苦しむ細民が城下を群行して動揺したが、宗矩は家中領民に儉約令を発して貯蓄を奨励し、藩米を放出して、餓死者の出るのを防ぐなど懸命に対策を講じ、名君として伝えられている。寛延二年三十五歳で歿した。）

### 一、「萬松」の二大字ほか合装の幅 一幅

松平治好 外。絹本・紙本墨書 一二七・五×四八

（松平治好筆「萬松」の二大字、筆者不詳の宝珠の絵・漢詩・花と題する和歌の四点が合装されている。）

恐らく治好の一族等、関係者の手蹟を一軸にしたものと思われる。治好は、明和五年福井十二代藩主重富の子として生まれ、寛政十一年家督を相続、十三代藩主となり、治国十六年にして文政八年五十八歳で歿した。）

一、和歌 一幅

松栄院（浅姫） 紙本墨書 三五×四七

（十一代將軍家齊の女、享和三年江戸城内に生まれ、文政二年福井十四代藩主松平齊承の内室となり、安政四年五十四歳で歿した。猶、本軸には松平春嶽が明治十二年八月に付した添書が合装されている。）

一、和歌 一幅

一橋治済 紙本墨書 三四・五×四八・五

松平春嶽添書「一橋最樹公御真筆 一橋儀同三司治済公即最樹公 御真筆ヲ所有セリ。真偽疑ハシキヲ以テ、

一橋徳川達道家扶中根正言ニ鑑定ヲ依頼ス正言拝見御真筆ニ無相違旨ヲ久留栄ニ托シ告ク。新ニ表装シ子孫ニ伝授ス。公ハ重富公ノ御舍弟、余ハ実家ニテハ祖父ニナル。永世大切ニ所蔵スルヲ希望ス。明治二十二年三月 松平従一位慶（花押） 謹書。」

（一橋治済は同宗尹の子、明和元年十一月家督を継ぎ、天明十年七十七歳で歿した。松平春嶽の祖父にあたり、十一代將軍家齊は実子である。）

一、「雪月花」の幅 一幅

田安齊匡 紙本墨書 九五×二八

松平春嶽自筆軸裏書「実父田安齊匡公御筆 春岳所有愛玩」

（安永八年四月一橋徳川家に生まれ、田安德川家二代当主となる。嘉永元年五月晦日歿。松平春嶽の実父である。）

一、寛恭君詠御親筆歌集 四冊

寛恭院 紙本墨書 二五×一八

(福井十三代藩主治好の女、同十四代藩主齊承の妹にあたり、のち阿部正弘に嫁し、嘉永五年八月歿す。本歌集の表紙は、いづれも朱色の水玉を漉懸けた鳥の子で、藍・朱・薄墨の三色墨流鳥の子の題箋を付した美しいものである。)

一、契冲和歌短冊折本 一帖

僧契冲 紙本墨書 三七×九

松平春嶽自筆箱裏書「子未だ隠居前、於越前商人より献呈之物也。有名ナル契冲之五十枚之真蹟也。

永世子孫珍藏スベシ。明治十一年八月二十二日 正二位松平慶永(印)」

(古雅な趣がある打雲短冊五十枚を表裏に貼込んだ折本仕立のもので、短冊一枚ごとに江戸期の極札が添付されている。)

一、和歌 一幅

高山彦九郎 紙本墨書 一二四×三三

松平春嶽自筆軸裏書「高山彦九郎真筆 春岳玩賞」

(高山彦九郎が祖父の墓前に叔父正業と共に唱和し、献歌した五首の和歌を筆録したものである。)

一、「橋北橋南云々」の詩 一幅

頼山陽 紙本墨書 一二五×二七

(頼山陽が京都嵐山に遊び菴亭に宿した際の七言絶句を自書したものである。もと、京の某医が珍藏する双幅であったが、安政五年橋本左内が桃井姓で京畿に活躍した際購求、江戸藩邸に帰って、主君にその一幅を呈上したものである。左内が所蔵したもう一幅は今日所在不明である。)

一、近世越前歌人和歌短冊 八十枚

澄翁等諸歌人 紙本墨書

(江戸期より明治に至る越前の諸歌人の和歌短冊であり、古式の越前工芸紙として美術史的価値を有する優品も少なくない。)

一、武江除日の詩 一幅

伊藤坦庵 紙本墨書 一一二×二二三

(坦庵は名を宗恕といい、豊臣秀吉遺臣の子として京都で生まれた。はじめ曲直瀬玄理に入門して医学を修めたが、のち漢学に志し朱子学者として名声を博した。福井四代藩主松平光通に招かれ藩の儒官となり、伊藤仁斉と最も親密に交わったという。宝永五年八十六歳で歿す。)

一、七言絶句・五言絶句 十五枚

伊藤坦庵 紙本墨書 二九×一三六

(いずれも半折を扁額風に横長に用い、七絶九枚、五絶六枚がある。)

一、夏夕水楼の詩 一幅

雨森炎洲 紙本墨書 二二三・四×二五・一

(名は増質、炎洲と号し、代々福井藩に仕え二百五十石を給された。学問を好み詩文にたくみで、当時藩内随一の学者として知られ、その博学と敏才を称讃され、数々の逸話が伝えられている。文化十一年七十六歳で歿す。)

一、五言律詩 一幅

力丸東山 紙本墨書 一一九×二九・五

(福井に生まれ、もと福井藩士。のち京都に出て漢学を学び、更に和漢の兵法を研究して、京都白山町に青松塾を開き兵学を教授した。寛政年間、一度帰福して再び藩士の列に加えられると願ったがついに聞入れられなかった。文化十二年京都で歿す。)

一、和歌短冊 一枚

井上翼章 紙本墨書 三五・八×五・九

(宝暦三年福井藩士梯左仲太三胤の三男として生まれ、天明元年に井上満喬の養子となった。のち藩の右史総領となって藩の記録を校定することが多かった。翼章の著書として有名なものに、越藩史略、越前国

名蹟考などがあり、その他著書多数がある。文政三年六十八歳で歿す。

一、「博文約礼」の書 一幅

前田雲洞 紙本墨書 二八×九六

（雲洞は名を潤といい、朽木侯執政の家に生まれる。成人の後、福井藩儒前田赤淵の養子となり、禄を継ぎ、明和七年書院番に列せられ十二代重富の侍読となる。文政二年五月、初めて藩校正義堂を開き、その学政をつかさどり、漢学を教授したが、天保三年九十七歳で歿した。）

一、七言絶句 一幅

片山蘭女 紙本墨書 一一三・五×二六・五

（安政六年福井に生まれ、名は蘭、九畹と号した。漢学を高野真斉に学び、京都に出て詩文を菊地五山に、書を僧無幻に学び、頼山陽・十時梅崖等と文雅の交わりをなした。のち江戸に出て文雅の名が高かったが、天保七年五十八歳で歿した。）

一、遊仙曲の詩 一幅

高野春華 紙本墨書 二二三・六×一七・四

（福井藩儒の家に生まれ、儒学者として藩に仕えた。嫡養子真斉に職を譲ったのちも、江戸の佐藤一斉・山本清溪・林述斎等に学び、諸名士と交遊した。春華は、書・兵法・武術・詩歌俳諧・音楽等の奥義を究め、特に福井の雅楽は春華より始まるといわれ、その名を広く知られていた。天保十年七十九歳で病歿す。）

一、「赤壁賦」の巻軸 一卷

浅見海楼 紙本墨書 二八×一三六・五

（海楼は福井藩士、その能筆を十代藩主松平宗矩に見いだされ、江戸の書家関思恭に入門を仰付られ、修行の後帰福、名声大いになり、揮毫を請うものが多かった。海楼はただ書のみならず、漢学詩文をよくし、小鼓にたくみで謡曲にも通じていた。明和九年歿す。）

一、七言律詩 一幅

関 明霞 紙本墨書 一六七×八五

(福井の橘宗賢家に生まれ、のち福井藩の眼科医山本家の養子となり、その業をおさめた。山本氏の本姓「関戸」をもじって関氏を称し、享和年中には職を退き京都に出、姓を京極と改めた。文政二年備中笠間に客死す。)

一、「和漢郎詠」の巻軸 一巻

足羽敬明 紙本墨書 二七×九一〇

(寛文十二年、福井足羽神社の祠官家に生まれる。学識深く足羽社記、越前国式内地名考等著書も多い。平素は節儉をととび、余財があれば凶書を購入した。宝暦九年八十八歳で歿す。)

一、七言二句 一幅

平乗寺功存 紙本墨書 四五×二九

(現福井市太田、平乗寺の住職であり、学徳兼備の名僧で、他宗を含め多くの僧俗が教えを乞うた。五十七歳の時、本願寺派の教学をつかさどる者として最高の地位である「能化大講主」に任ぜられ、寛政八年七十七歳で入寂した。)

一、七言句 一幅

憶念寺良雄 紙本墨書 三二×一三八

(南條郡金柏村、真宗大谷派憶念寺の住職。京都に出て真宗のほか、諸宗の教学を学び、帰国後は諸国の僧俗が、その学徳を慕って列をなしたという。天保十年六十二歳で入寂す。)

一、「投宿葛野」の詩 一幅

浄勝寺丹山 紙本墨書 一一三×四八

(丹生郡絲生村真宗大谷派浄勝寺の住職。若くして一切経の校定を決意し、京都建仁寺に所蔵の大蔵経を用いて研究に没頭すること、文政九年より十一年間に及んだ。その間、文雅の心が深く、頼山陽をはじめ当代一流の文人と親しく交わった。弘化四年七十三歳で入寂す。)



## 松平春嶽関係

### 一、「新年作」「和春嶽翁原韻」の書 一枚

松平春嶽・張魯生 紙本墨書 三五×一三八

（松平春嶽、張魯生の合作で、明治十三年初頭の春嶽の新年作の詩に、張魯生が和して一詩を書加えたものである。）

### 一、「くらの山々」の和歌 一幅

松平春嶽 紙本墨書 一三五×三一・五

「くらの山いよ／＼高くのほりきて ふもとの松そ恋しかりける 慶永詠」

### 一、十三夜兼題の書 一幅

松平春嶽 紙本墨書 三一×四四・五

（松平春嶽十八歳の書である。「右十三夜兼題也」として、「都月」「月下交遊」等、十三の兼題を列記してある。）

### 一、「濟世功名々」の詩 一幅

松平春嶽 紙本墨書 一二八×五二・五

「濟世功名付豪傑 野人事業在林泉 春嶽」

（本幅は南葵文庫より春嶽公記念文庫に移管されたものである。）

### 一、「孔子神位」の書 一幅

松平春嶽 紙本墨書 一一三×三〇

松平家々令武田正規筆由緒書「一、孔子神位ノ御軸ハ 従一位慶永公御真筆ニシテ安政二年乙卯六月二十四日明道館開館式有之 御家中一統入学被ニ仰付候節右明道館御床正面ニ掛リ神酒御供へ一統礼拝候者也。  
（中略）明治二十六年十月二十七日 家令武田正規謹書」

（正規由緒書にある通り、安政二年六月明道館開館に際し、松平春嶽が浄書したものである。）

一、「小倉山云々」の和歌 一幅

松平春嶽 絹本墨書 一一一×三二七

「小倉山霧立ちこめてみせずとも妻こふ鹿の声さやかなり。

おのづから哀もふかき秋のよにつま恋ひて鳴く峰の掉鹿。権中納言從二位源慶水」

（本福は南葵文庫より春嶽公記念文庫に移管されたものである。）

一、「不自恭敬云々」の詩 一幅

松平春嶽 紙本墨書 一三六×四一

「不自恭云敬其身云者不能受云他人恭敬」 春岳水」

一、「安羅多満留云々」の和歌 一幅

松平春嶽 紙本墨書 一三七×五六

「安羅多満留云年登思云閉婆於云晒豆佳良許々云呂濃土計起君牙代乃春 慶水詠」

一、「白髮空嗟云々」の詩 一幅

松平春嶽 紙本墨書 一三四×四五

「白髮空嗟雪滿云簪。菲才難云服聖恩深。思云君惟有此忠愛。終世不移云山岳心。録感懷田製春岳老逸水」

（本幅は、南葵文庫より春嶽公記念文庫に移管されたものである。）

一、松平春嶽幼時臨書綴 九綴

松平春嶽 紙本墨書 四〇×三〇

①岡田頭忠法帖御臨書拔萃 天保十年～同十三年。

②董其昌後赤壁賦御初臨 天保十三年～同十四年。

③清康熙主臨蘭亭帖御臨書 天保十四年中。

④董其昌勝王閣序御臨書 天保十四年中。

⑤董其昌後赤壁賦御臨書 天保十四年～同十五年。

⑥董玄宰畫錦堂記御臨書 天保十五年中。

⑦董其昌舞鶴賦御臨書 天保十五年中。

⑧無表題 天保十五年～弘化二年。

⑨無表題 弘化二年～弘化三年。

(松平春嶽が天保十年より弘化三年、十二歳から十九歳にかけての手習い綴である。)

## 一、板橋墨戲の幅

松平春嶽・鱸松塘・伊藤友四郎・大沼枕山・川田江・山中静逸・坂田鷗客の合作 紙本墨書 一二七・五  
×六七

(松平春嶽が「板橋墨戲」と題字を付し、諸氏が書画の寄書をしたものである。「板橋墨戲 慶永記」という春嶽筆の小紙片が付属している。)

## 一、松平春嶽所用印 九十三顆

①「春嶽」「源慶永字公寧」「明德惟馨」 河崎致高刻 二顆

(致高は福井藩士で、和歌をよくし、特に篆刻に巧みであった。藩関係の公印をはじめ、貴顕の雅囑による作品も多い。明治二年十月、讒言にあい自害する。)

②「柴井真逸」「謙」「慶永」「字余白公寧」「東閣官梅動詩興」 三顆

松平春嶽自筆箱裏書「慶応三年丁卯春、浅野蔭潭所寄、命佐藤誠篆刻」

③「真賞」 一顆

箱書「出雲国玉造所産 碧瑪瑙印 杜元韻刻 明治七年一月 雨森精翁呈」

④「靄々春雲」「慶永印章」「觀厥成」 三顆

箱裏書「池田彈正大弼所贈、命石川温刻之 明治三年庚午春正月」

⑤「榮叱」「源章慶永」「従一位」 三顆

箱裏書「備前産辟邪鈕凍石印三顆 池田侍従所贈 命平井益齊刻之 慶応四年戊辰八月」

⑥ 「春嶽真逸」 一類

(明治元年六月、山内容堂が自ら刻んで春嶽に贈ったもの。印側面に「戊辰六月戲刻贈 春嶽雅兄 九十 九洋外史」とある。)

⑦ 「高山仰之」 「慶永之印」 「春嶽」 三類

⑧ 神代文字印 「ミナモトヨシナカノシルシ」 「カラコトハヤマトコトハラタテヌキニヲラハウエナキニシキナリマシ」 二類

(松平春嶽は中根雪江の感化により熱心に平田学を学んだが、これもその影響下に作られたもので、平田篤胤が「神字日文伝」に説いた神代文字を用いている。)

⑨ 「慶永」 「放浪泉石」 二類

⑩ 「忘機」 「天地一沙鷗」 「飄々何所似」 三類

⑪ 「人生歸有道」 「号春嶽」 「源慶永字公寧」 二類

⑫ 「春嶽」 「言忠信行篤敬」 三類

⑬ 「煙霞」 「松永」 「鷗渚釣史」 三類

⑭ 「養賢堂」 一類

⑮ 「従一位」 「慶永」 二類

⑯ 「大学别当」 「戸部尚書」 一類

その他 五十八類

## 一、書画帖

### 一帖

大沼枕山・鱸松塘・山中信天・水本成美・春木南溟・勝海舟・藤堂帰雲・宮道式胤・山岡鉄舟・浅野蔭潭・川上冬崖・津田香巖・津田霞谷・長松幹・北川恭明・北川東嶼・巖谷修・金井之恭 紙本墨書(一部彩色) 一三八×四三・五

(明治二年中、松平春嶽が諸士に依頼して書画の揮毫をうけ、愛蔵した折本である。)

## 橋本左内関係

### 一、「半生落魄」の詩 一幅

橋本左内・頼三樹三郎 紙本墨書 一三八×四三・五

「掩門深坐画爐灰 日々東風帶雪來 紫陌垂楊夜無色 関心一樹上林海 三樹醉客醇書戊午二月書事之詩  
半生落魄客山東 嘗尽人間達又窮 浴罷閑居無一事 臥看星斗滿秋空 戊午初秋偶成 紀 夢回燭燼寂茅  
齋 喜見氷輪宿老槐 幽興開窓推句 坐恐露氣襲衰骸 句下脱久字」

松平春嶽自筆箱書「頼三樹、橋本左内真蹟 春嶽清玩」 「明治十一年四月」

（「掩門深坐云々」以下の頼三樹三郎の詩、「半生落魄云々」以下の橋本左内の二つの詩を一幅に合装したものである。）

### 一、「孤月暗明」の聯 一幅

橋本左内 紙本墨書 一一九・五×一四

「孤月暗明雲有罪。扁舟來去水無心。」

（橋本景岳全集下卷一五五〇頁、名語集の中に収められている聯一行書である。）

### 一、「雪中松柏」の詩 一幅

橋本左内 紙本墨書 一一一×三二・五

「雪中松柏愈青々、扶植綱常在此行、天下久無龍興勝潔、人間何独伯夷清、義高便覺生堪捨、礼重方知死甚輕、南八男兒終不屈、皇天上帝眼分明。戊午之冬録橋本紀」

（雪中松柏の詩は、浅見綱齋が著わした「靖獻遺言」卷之六、謝枋得の編中に、その遺言として掲げられているもので、安政五年十月、左内が大獄問題に連座して、滝勘蔵預けの幽囚生活に移った時、同じ運命下の自分の心境を示そうと書いたものと推察される。詩の出所、意義からいっても極めて深刻なものである。）

### 一、「至宝」石擢りの扁額 一面

岳飛 紙本石擢 二五・五×五一・五

(岳飛を景慕するという義から「景岳」と号するなど、かねてより岳飛を慕っていた橋本左内が、大阪緒方洪庵の適塾に勉学中に、ある書店の主人から譲り受けたものと伝えられている。昭和十年、橋本家から本文庫に移管された。)

## 中根雪江関係

### 一、七言絶句

一幅

中根雪江 紙本墨書 一三六×六二

## 橘曙覧関係

### 一、「うつくしく云々」の和歌

一幅

橘曙覧 紙本墨書 一二九×四八・五

「うつくしく降れる初雪たやすくは

いかで言葉のあともつくべき 曙覧」

### 一、「御めぐみの云々」の和歌

一幅

橘曙覧 紙本墨書 一二三×五一

「御めぐみの露をあまたに戴きて

すすろ色そふすな園かな 曙覧」

(元治二年二月の作。この項の曙覧の書蹟類は、いづれも松平春嶽の愛蔵品である。)

### 一、「かけがねを云々」の扇面和歌

一握

橘曙覧 紙本墨書 扇全長二六

「かけがねをかくればはつしはつしして

夜たた寝させぬ柴戸の風 曙覧」

- 一、和歌短冊 二十六枚  
(数少ない扇面作品の一つで、歌集にはない歌である。晩年の書風と思われる。)

橘曙覧 紙本墨書 三六・五×六

(いづれも曙覧より松平春嶽に献呈したもので「詠四時花八首」八枚のほか、春嶽の曙覧宅訪問の感激を歌った著名なものなども含まれている。)

## 幕末諸士関係

- 一、「長生不老仙」の書 一幅

徳川慶喜 紙本墨書 一三〇×三〇

- 一、「地震者陰々」の書 一幅

徳川斉昭 紙本墨書 一三三×四一

「地震者陰之盛也、陰之象臣也、後宮也、四夷也、三者不可過々盛々、則陰為変而動矣。」

(地震は陰の盛也。陰の象は臣也。後宮也、四夷也。三者は過盛なる可からず。過盛なれば則ち陰変じて動となる。)

安政の大地震の惨害に託し、井伊大老を中心とする幕閣、江戸城大奥、米・英・佛・魯の外夷横行等の危険を警告したものであろう。

- 一、七言律詩並和歌二点合装の幅(付、徳川斉昭添書翰の巻軸) 一幅(巻軸一卷)

徳川斉昭・松平春嶽 紙本墨書 三三・六×四〇・三(六・二×五〇・三)

箱書「安政二乙卯歳二月十一日御懸物御箱共出来」

徳川斉昭添書「為新年御尋問」華翰并雲海共御投惠令「深謝」候、芳韻玉詠盛吟之餘り野詩拙歌供御一咲候也。

正月念一 松越殿」

(安政二年元旦、松平春嶽が新年の挨拶に詩と歌を添えてやったのに対して、徳川斉昭より、返礼の書翰

と詩歌を送附して来たものである。この際の両者の詩歌を春嶽が命じて一幅に仕立てさせたものと思われる。

一、「九十賀和歌」折本 一帖

松平幸子 紙本墨書 三七×三二・五。厚四・五

(久我建通女、福井十七代藩主茂昭夫人。本折本は、松平幸子が書写して春嶽に贈ったものである。)

一、「至誠如神」の書 一幅

有栖川宮熾仁親王 絹本墨書 一三二×四一・五

(有栖川宮熾仁親王より松平春嶽が拝受したもの。)

一、「人心懼危」の書 一幅

近衛忠熙 紙本墨書 一二五×二九

「人心懼<sub>レ</sub>危、道心懼<sub>レ</sub>微。」

(関白基前の子、文政七年内大臣となり、その後右大臣、左大臣等を歴任する。一時出家して翠山と号したが、文久二年六月、再び召されて関白となる。王政維新に尽したが、常に温和の説を持ち、軽挙を誠しめた。明治三十一年三月、九十一歳で歿す。)

一、「其身正不」の書 一幅

一条忠香 紙本墨書 一三四×五六・五

「其身正不<sub>レ</sub>令而行、其身不<sub>レ</sub>正雖<sub>レ</sub>令不<sub>レ</sub>從。」

(関白忠良の男、文化九年に生まれ、従一位左大臣にすすみ、文久三年歿した。照憲皇太后御実父にあたる。)

一、「庭前幽花」の詩 一幅

三條実美 絹本墨書 一四三・五×五〇

(明治十八年二月の書で「三條実美公真蹟 春嶽愛玩」との軸裏書がある。)



一、「墨田川花の云々」の和歌 一幅

三條実美 紙本墨書 一三四×三一

(詞書に「春嶽君の歌をこひ給へるに」とあつて、松平春嶽のもとめに応じ贈ったものであることが知られる。)

一、子日松の和歌並添書合装の幅 一幅

千種有功・同有文 紙本墨書 五二・五×六四

(千種有功の和歌と、その男有文の添書が合装されている。有文の添書によれば、松平春嶽より父の遺筆をもとめられた有文が、亡父の子日松の和歌懐紙を選んで贈ったものである。)

有功は歌人として著名で、千々廻舎を号し、従来の堂上風を破り名声を得た。和漢草・千々廻舎集・日枝アリコトの百枝等の著書があり、正三位左近衛権中将に進み安政元年八月五十八歳で歿した。)

一、「門外産飛云々」の詩 一幅

沢 雪城 絹本墨書 一一二・五×四八

一、「槓の戸を云々」の和歌並梅に月の画 一幅

志貴婦 紙本墨書 一三六×三二・五

「槓の戸をこよいはささし君やこむ

おぼろ月よに梅かをるなり 九十三妃 志き婦」

一、「北風巻頑雲云々」の詩 一幅

伊達宗城 紙本墨書 一一一×三一・五

「北風巻頑雲、陰晴安可卜、山月出漸高、独照南窓竹。弄鏃」

一、「春前柳葉云々」の詩並添書翰 一幅

伊達宗紀 紙本墨書 一四五・五×五六・五

(四国宇和島藩主、弘化元年養子宗城に家督を譲り隠居する。書幅には「明治二十二年 従二位伊達宗紀

「齡百歳」と署名があり、百歳の書である。

一、「誰道世界」の詩 一幅

山内容堂 紙本墨書 一七七・五×三五

(「春岳兄索余書」、録「旧心」贈之、東海外史」と署名がある。)

一、下江舟中懐の詩 一幅

山内容堂 絹本墨書 一三五×三五

(松平春嶽自筆で「下江舟中容堂先生詩并直蹟 春岳清玩」と軸裏書がある。容堂より春嶽に贈ったものである。)

一、品川竹枝の詩 一幅

山内容堂 絹本墨書 三四・五×八十

(松平春嶽自筆で「品川竹枝容堂親友所贈 春嶽永清玩」と軸裏書がある。)

一、「咫尺天顔侍紫宸」の詩 一幅

鍋島直正(閑叟) 紙本墨書 一二〇・五×五九

一、「杜道醉人少」の詩 一幅

鍋島直正 紙本墨書 一〇八×三〇・五

一、七言絶句 一幅

鍋島直正 紙本墨書 一〇五×六〇・五

(鍋島直正より松平春嶽に贈ったもの。)

一、「夏雲多奇峰」の書 一幅

池田慶徳 紙本墨書 一二六×二八・五

(天保八年徳川斉昭の五男として生まれ、嘉永三年幕命により鳥取藩主池田慶栄の歿後を継ぎ藩政改革を行なう。文久中、京に出て王政維新のため努力し、戊辰の役には奥羽征討に偉功があった。)

一、「黄鳥一声云々」「江湖満池云々」の書 二幅

松平斉民 紙本墨書 一三六・五×三〇・五。一三七×三〇・五

「黄鳥一声酒一杯」「江湖満池一漁翁」

(松平斉民は確堂と号し、文化十一年十一代將軍家斉の十六男に生まれ、津山藩主となる。文武を奨励して善政を施し、幕末藩論の去就を勤王に一致させ活躍した。)

一、「歌管声停云々」の詩 一幅

小笠原長守 紙本墨書 一四一×六四

「歌管声停月已低、花深人静九重闈、巫山夢恨天明早、一嘯流鶯御柳西。」  
宮裏映 化堂草 晩近製

(勝山七代藩主小笠原長貴の子として生まれ、天保十一年八代藩主となる。化堂と号し、書画を善くし、風雅を愛し詩作・俳句にたくみで、天下の文人と交遊した。生涯最も詩作を愛し、自筆の詩稿が数百冊にのぼったと伝えられる。明治二十四年七月歿す。)

一、「常娛閑適云々」の詩 一幅

間部詮勝 紙本墨書

一、「楊柳長斉云々」の書 一幅

間部詮実 紙本墨書 一三六×三二

(間部詮実は老中間部詮勝の長子で、父の封をつぎ鯖江藩主となるが文久三年二十七歳で歿した。文武兩道の明君として知られ、何事によらず見聞するところを後日のため記し、数十巻に及んだと伝えられる。)

一、「夏夜露坐の詩」 一幅

本多副元 紙本墨書 一三二×六四

(弘化二年松平頼功の二男に生まれ、文久三年武生領主本多家を相続、福井藩家老となる。長州征討・会津征討等には、藩主名代として藩兵を指揮し、明治十七年男爵を拝授、同四十二年歿す。)

一、「畏天」の書 一幅

前田齊泰 紙本墨書 四五・五×一〇三・五

(加賀十二代藩主齊広の長男に生まれ、文政五年十二代藩主となる。天保以後、国産奨励に力を入れ、海防につとめ、親長派の藩士達に圧力を加えた。慶応二年隠居、明治十七年七十四歳で歿す。)

一、七言二句 一幅

松平北海 紙本墨書 一二八・五×三二・五

一、「海航誰自云々」の詩 一幅

岩瀬忠震 紙本墨書 一三三・五×六二

「海航誰自任只許碧翁知五州何謂遠吾亦一男兒 蟾州 岩瀬 震」

松平春嶽自筆箱書「岩瀬肥後守真蹟 橋本左内所贈 春岳玩賞」

一、「曝骨刑場云々」の詩 一幅

伊藤博文 絹本墨書 一五七×五三

「曝骨刑場吾不<sub>レ</sub>及、存心社稷與君同、追懷往事感何限、落木秋風暮雨中。

吊橋本景嶽先生藏  
後学伊藤博文

(橋本家より本文庫に移管されたもの。)

一、「天徳只是云々」の書 一幅

勝 海舟 紙本墨書 一二九×六四・五

「天徳只是策無我、王道只是策愛人。」

一、「大船の多ゆたふ云々」の和歌並碇の図 一幅

勝 海舟 紙本墨書 一一二・五×三二

「大船のたゆたふおりはひとすじに  
たれをちひさのいかりとやせむ」

一、甲三片桐使君之孤墳有感の詩 一幅

勝 海舟 紙本墨書 一三七×五九

「衰運乏良輔 百折無寸補 付度多門破

況吾愚且魯 憶昨難危時 慨歎同憂苦

答慕使君賢 潜思窺肺腑 豈輕議当年

孤墳復塵土 墜葉人無掃 濺淚雲弔古

弔片桐使君之孤墳有感 海舟居士」

一、「牛羊花而」<sup>云々</sup>「簌之物之」<sup>云々</sup>の書 二幅

（勝 海舟 紙本墨書 一二八×三二・五

「牛羊花而壯長而已矣」 「簌之物之糠糝在前」

一、「人世如堪」<sup>云々</sup>の詩 一幅

勝 海舟 紙本墨書 一三〇×六七

一、「なかは死し」<sup>云々</sup>の和歌 一幅

勝 海舟 紙本墨書 二八×四〇

一、志幾嶋之栞の折本 一帖

松平春嶽・同茂昭ほか 四一×三一、厚四・五

（松平春嶽を中心とする近親・知友の短冊百六枚、色紙十四枚を旧福井藩士で初代福井市長の鈴木準道が、折本に仕立てさせたものである。本解説目録―文書編―の二、古文書の項に収めた朶雲群集と対をなし、

同一の桐箱中に収められている。昭和初期、鈴木家より本文庫に寄贈された。）

一、「表黒裡紅」<sup>云々</sup>の詩 一幅

横井小楠 紙本墨書 一一〇×五八

「表黒裡紅九曜鮮 恩深阿母寿如仙 家郷千里乱山雪 何日棒持無」<sup>膝前</sup>

<sup>仲冬十四日秋田參政伝 大夫人之命賜衣於賤母 賤母何幸 受此寵榮 感佩之至恭賦七絶奉呈 横井 存</sup>

（安政五年十一月、横井小楠が福井より熊本に帰国するに際して、松平春嶽夫人勇姫より細川家定紋九曜の紋服を賜わったのに感激した詩である。）

一、「斯道在懷」の詩 一幅

横井小楠 紙本墨書 一〇七×五七

「斯道在懷三十年 向公一日始談天 天行如レ此公看取 雨雪風雷發自然」 奉和 春嶽老公述懷韻  
横井存拝

一、「梅か香に」の和歌 一幅

由利公正 紙本墨書 一二八・五×三四・五

「むめか香に社のほとりは春めきて  
となりの庭もうくひすの声」

一、「秧田青已遠」の詩 一幅

佐久間象山 紙本墨書 二九×五三

(詞書に「辛酉夏月、為竹村子習題山水画」とあって、文久元年の染筆である。)

一、「粉梅黛柳」の詩 一幅

梁川星巖 紙本墨書 一二七×五七

「粉梅黛柳与春舒 共道繁華復厥初」此老長類君知否 関心転海一封書

(梁川星巖は美濃の人、妻紅蘭と諸国を歴遊し、詩人として名声があつた。星巖の詩は古雅清奇、独特の風骨があつて、世に日本の李白とうたわれる。梅田雲浜・頼三樹三郎等の志士と交わり国事に奔走したが、安政五年九月七十歳で歿す。)

一、「世上毀誉」の詩 一幅

西郷隆盛 紙本墨書 一三九×六四

「世上毀誉軽似塵 昭前百事偽邪真 追思弧島幽囚案 不在今人在古人」

松平春嶽自筆軸裏書「明治二年三月千本貫一呈ス。南洲西郷隆盛詩真筆 春嶽愛玩。」

一、「奉勅軍航」の詩 一幅

大久保利通 紙本墨書 一四三×四一

「奉」勅軍航向「北京」 黒烟堆裏蹴「波行」 和成忽下通州水 閑臥「蓬窓」夢自平 下通州 甲東」

一、「世事有千変」の聯（付、江湖翁添書翰）二幅

木戸孝允 紙本墨書 一一二×一五・五

「世事有千変」 人生無「百年」辛未（明治四）十月 松菊生

一、「見るたびに」の和歌並富士の図 一幅

高崎正風 紙本墨書 一一二・五×三二・五

「見るたびにいよ／＼たかくあふかれて

ふじこそ山のひじりなりけれ 正風自画」

（天保七年薩摩藩士として生まれ、島津久光を輔翼した。戊辰役には官軍参謀として功をたて、後、宮中に入り御歌所長、枢密顧問官となる。明治四十五年歿す。）

一、「おほみ代の」の和歌 一幅

八田知紀 絹本墨書 一三三×三三

「大嘗祭悠紀方甲斐国青柳里

おほみ代の風にしたかふ民くさの

すかたをみする青柳のさと 知紀」

（寛政十一年薩摩に生まれ、香川景樹に学び近衛家に仕える。明治元年皇学所御用掛となり、明治五年には宮中歌道御用掛となる。薩州閩を背景とし桂園派を御歌所へ持込んだ。）

一、「雲際依々」の詩 一幅

塩谷岩陰 紙本墨書 一一二×六〇・五

（享和六年江戸に生まれ、昌平校にはいり松崎慊堂に学び、同門の安井息軒とならび称せられた。はじめ浜松藩の水野越前守忠邦に仕え、後昌平校教授となり、年来の宿志である修史編述を許されたが、着手後

間もなく歿す。）

一、「為政多年」の詩 一幅

大沼枕山 紙本墨書 一四〇×三一

(文化十四年江戸に生まれ、尾張藩儒臣となる。梁川星巖・大窪詩佛・小野湖山等と交わり、漢詩壇に名声をはせた。本詩の詞書には「始謁春嶽公敬呈一絶」とある。)

一、「京畿無地」の詩 一幅

土方久元 絹本墨書 一三六×五七

(天保四年土佐藩郷士土方久用の子とし生まれ、武市瑞山の誓約盟約に加わって尊王攘夷運動に奔走、八一八政変で七卿に随行して西下し、三條実美の信任を得て太宰府に移った。明治後、宮内大臣、枢密顧問官等を歴任、大正七年歿す。本詩の詞書には「緑拙作乞春嶽公叱正」とあり、明治二十一年東京関口台町の松平春嶽邸訪問の際揮毫したものである。)

一、「不恨老将至」の詩 一幅

笠原白翁 紙本墨書 一〇六×一八・五

「不恨老将至 栖遲翰墨林 一枝机上筆 三尺床頭琴 晝静昏昏眠 夜深細々斟 半生慚負俗 聊得古人心」  
不恨三首之一 林下叟

(文化六年越前の足羽郡東郷村に生まれる。はじめ江戸の磯野公道について古医学を修め、のち西洋医学を志し京都の日野鼎哉の門に学び、越前に蘭医学を弘めた。種痘法の奨励方を松平春嶽に建言し、嘉永二年十二月、自宅隣に浜町仮除痘館を開設、町民に種痘を実施するなど生涯医学発展に貢献し、明治十三年八月七十二歳で歿す。)

一、「一歳十二回」の詩 一幅

高野真齋 紙本墨書 一一二×二七・五

(天明八年福井藩士広部延康の次男に生まれ、享和三年高野春華の養子となり、その家督を嗣ぐ。のち儒



者兼書院番となり近習に列す。安政二年、藩校明道館が創立されるや、その教授に任命され、安政六年七十三歳で歿す。

一、「曾承天詔<sup>云々</sup>」の詩 一幅

林 毛川 紙本墨書 一三七×五四

(林毛川は初名崑三郎、のち棟・主税等と改める。勝山藩に仕え藩政に関与し、藩医秦魯齋をして藩校成器堂を創建、勝山文庫を建て内外の典籍を集め、弓馬鎗銃砲文武の教場を具備した。安政五年五十八歳で病歿す。)

一、「寿與山齊福隨春至」の書 一幅

前田梅洞 紙本墨書 七〇×三一

(天明五年、福井藩儒前田雲洞の庶長子として禄を継ぎ、藩の儒官となる。十五代藩主齊善の侍読となり、父の業を承けて桜馬場学舎を経営し、詩文に巧みで名があった。安政三年七十二歳で歿す。)

一、「秋雨夜来<sup>云々</sup>」の詩並墨竹の図 一幅

蒔田雲処 紙本墨書 一三五×六三

一、「春来春去<sup>云々</sup>」の詩 一幅

吉田東篁 紙本墨書 一〇八×三〇

「春来春去幾春々 更数今春四十春 珍重小簷旧梅樹 清香百倍昔年春

末  
年  
試  
筆  
兼  
齋  
主人

(福井藩儒官。文化五年に生まれ、藩儒前田雲洞・清田丹藏に学び、更に京都の鈴木撫泉に私淑して浅見綱齊の遺化をうけ、崎門派の学風を主唱し、その門下に橋本左内、由利公正、日下部太郎等多くの幕末の俊秀を輩出した。明治八年六十八歳で歿す。)

一、「其時正成肌の守<sup>云々</sup>」の書 一幅

広部鳥道 紙本墨書 一三五・五×六二・五

(福井藩士。藩儒高野真齋に漢学を学び、禅学をも究めた。福井に横井小楠が招かれるや、徹夜で国事を

論じあい互いに屈しなかった。門下から日下部太郎など優秀が続出している。明治十一年福井に広部私学  
校を創立、晩年京都に移り、本願寺大学校で漢学を教授、明治十四年京都に歿した。）

一、「癸酉初秋応需の詩」 一幅

荒川汶水 紙本墨書 一三七×六二

（福井藩士。藩儒高野真斉に漢学を学び、のち詩文を以って悠々自適の生活を送る。壮年に至り藩主に詩  
文を講じ、福井城下に私塾を開いて漢学を教えた。明治十八年に歿す。）

一、「野築郊居<sup>云々</sup>」の詩 一幅

河野苴洲 紙本墨書 一三八×六二

（文化五年越前の丹生郡本保村に生まれる。幼年より学問を好み、詩文を草し、閲読しない書籍はないと  
まで称されたという。仏教を崇信し、常に念珠を手にして貧者に施しをし、その徳をたたえられ、明治十  
八年に歿した。）

一、「漫筆十絶之一」の詩 一幅

三国幽眠 紙本墨書 一三六×二六

（文化七年越前の三国湊に生まれる。はじめ近江国彦根の中川六郎に学び、のち京都に出て摩島松南に  
入門し、数年後京都に私塾を開いた。天保九年「古註孝経」を著して光格上皇に奉り、これにより鷹司家  
の儒臣となる。安政五年、安政大獄に連座して中追放に処せられ、一時近江に寓居したが、明治二年議定  
鷹司輔憲の議事局扶に挙げられ、更に教部省の権大講義に補せられた。明治二十九年八十七歳で歿す。）

一、「小心翼<sup>云々</sup>」の詩 一幅

山田榎谷 紙本墨書 一三〇×六六・五

一、「那説盧生<sup>云々</sup>」の詩 一幅

村田謙斎 紙本墨書 一三三×三〇

一、「貞松卓々<sup>云々</sup>」の詩 一幅

森 余山 紙本墨書 一三四×四七

軸裏書「余山森先生、名時習、字幽吉、称恕輔、又号悦翁、平安人、学於亀井南溟後在江都師井上四明、文章絶倫才名冠震、嘉永之頃来越前府中被举儒員、為立教館教頭、出于門者大学総長渡辺洪基前田松閣外数名也。」

一、寢覚林の詩

一幅

瓜生 寅 紙本墨書 一三五×三三

(天保十三年福井藩士として生まれ、京都の新宮涼庭に蘭学を、長崎の米人フルベッキに英学を学ぶ。文久二年幕府が長崎に英学校を開設するや、その教授に抜擢されたが、のち帰藩して藩士に英語を教える一方、横浜の英軍兵営に出入りしてその兵学を研究した。明治三年大学別当松平春嶽に召されて上京、同郷の岩佐純と共に学制取調掛十二人の内に加えられ「学制」を起草する。その後、実業界に入り大正二年七十二歳で歿した。)

一、「撫枕無眠云々」の扇面七絶 一幅

藤森弘庵 紙本墨書 三七×四七・五

(江戸に生まれ柴野碧海・長野豊山等に学び漢学者としてたち、詩文に巧みであった。はじめ土浦藩につかえ、のち塾を開いて門弟を集め尊王攘夷を首唱したが、安政の大嶽に捕えられ追放された。その後下総行徳に閑居し、大いに名声をあげ文久二年六十四歳で歿した。)

一、「夢醒高枕云々」の詩 一幅

滝谷寺道雅 紙本墨書 一〇五×二九

(文化九年京都六角通、池田家に生まれた。はじめ江戸浅草の大護院に入って仏学をおさめ、神道儒学にも精通し、安政三年三国の真言宗滝谷寺住職となる。梅田雲浜、頼三樹三郎、梁川星巖等と交遊して尊王攘夷を唱え、月照・月性と並んで幕末の勤王僧三傑に数えられている。慶応元年五十四歳で歿す。)

一、帰去来辞折本

一帖

滝谷寺道雅 紙本墨書 二九×一二 一〇八折

(元治元年十月の書)

一、「練得身形」の詩 一幅

青蔭雪鴻 紙本墨書 一三六×四四・五

(天保三年越前の武生に生まれる。鴻雪爪の後を継いで福井孝顕寺住持となる。雪爪門下の逸材で、雪爪の山高水長図記に「余に従って薪水の労を取る者、雪鴻に若くはなし」と記してある。明治十六年永平寺貫主となり同十八年五十四歳で歿した。)

一、七言絶句並山水画 一幅

祐善寺自笑 紙本墨書 一三四×四九

(明治二年大谷派祐善寺の住職となり、同九年清国上海江蘇教校教授に任ぜられる。明治十九年祐善寺に歿す。五十五歳。)

一、和歌短冊折本 一帖

太田垣蓮月 紙本墨書 三九×一九 七折

(松平春嶽所蔵の蓮月自筆短冊二十八枚を大正六年一括して折本仕立としたもの。春嶽と蓮月の間に、深い連繫があつたことが知られる。)

一、飲中八仙歌の折本 一帖

大山陶斎 紙本墨書 三〇×一二 五四折

(鯖江藩士青柳致敬の二男として生まれ、後大山柳塙の養嫡子となった。書道家として高名であらゆる書体に通じていた。明治三十一年七十八歳で歿す。)

一、重光協洽至日書於翠雲居の書 二幅

青木龍峯 紙本墨書 一一六・五×三〇

(文政十一年福井藩士に生まれ、鎗術・柔術・剣術・馬術・砲術など、一として通ぜぬものがなかった。)

藩儒高野真齊について漢学を修め、江戸の正木龍眠に書道を学び福井藩書師に任ぜられる。維新後、文部省記録課、警保寮、内務省等に勤務したが、明治十七年以降は専ら書道を教授した。同四十二年八十歳で歿す。

一、宗文天祥正気歌の折本 一帖

青木龍峯 紙本墨書 二八×一二・二 五三折

一、「春前柳葉云々」の書 一幅

大島蓬洲 紙本墨書 一三六×二二

(福井藩土の家に生まれ、藩の右筆であった。謡曲を嗜み、幼少より書を好み、長さ一尺五寸の大硯を用いて日夜修行を怠らず、遂にその硯が磨滅して穴があいたという。蓬洲はいかに大字であっても、容易に位置をくずさなかつたので、世間では節用先生と呼んだ。明治十三年に歿した。)

一、「紅筵碌樹云々」の詩 一幅

大山陶齋 紙本墨書 一三六×六四

一、辛未春晚篆於神京客舎の書 一幅

小曾根乾堂 紙本墨書 一三一×三二・五

一、「天理路上云々」の書 一幅

南條得雄 紙本墨書 一〇二×三二

一、「風潭百頭云々」の書 一幅

大嶋怡齋 紙本墨書 一三五×三二

一、聞北征將士歸奏凱歌喜賦一絶 一幅

眠雲大人 紙本墨書 二九・五×三七

一、「兀坐繙經云々」の書 一幅

西周 紙本墨書 一四一×三二・五

「兀坐緜<sup>レ</sup>経夜亦深 寒燈無<sup>レ</sup>焰影沈々 時聴窓外拼欄樹 策々戰<sup>レ</sup>風驚<sup>レ</sup>宿禽<sup>一</sup>」  
右録<sup>レ</sup>藤井主人西周

一、修新田義貞五百年祭有感の詩 一幅

井上 馨 紙本墨書 一三一・五×四三

一、松平慶民印譜色紙 一枚

松平永芳作成 紙本押印

(初代春嶽公記念文庫主松平慶民が、昭和二十三年七月他界時所有していた印章類を捺印したものである。)

一、春嶽公記念文庫竹製標札 一点

桃井義久刻 竹製彫刻 三〇×八・五

裏書「越前国丹生郡納田中の住 直常之裔 七十七叟 桃井義久」

(大正六年春嶽公記念文庫設立後、桃井義久が寄贈したもの。)

一、「百歳光陰一場之夢<sup>云々</sup>」の書 一幅

岡田啓介 紙本墨書 一五〇×四〇・五

「百歳光陰一場夢 三春消息幾番花」

一、「老脚蹠躑<sup>云々</sup>」の色紙 一枚

岡田啓介 紙本墨書 二四・二×二七・二

「老脚蹠躑 恩光許杖朝 感歎流涕切 輪力道迢遙」  
感喜恭賦 八十翁 岡田啓介

(昭和二十二年一月十五日、八十歳の高齡に達した岡田啓介が、宮中杖を下賜され使用を許された節の感懐を賦したもの。)

一、壁書謹写の記 一卷

島田墨仙 紙本墨書 二一・二×六二〇 (巻軸)

(昭和六年三月、明治神宮絵画館に収められた「王政復古」図の作者島田墨仙が、この図謹写の苦心を記して松平慶民に呈したものです。墨仙は慶応三年福井に生まれ、父の雪谷及び橋本雅邦等に師事して画技を字

んだ。明治三十六年、内国勸業博展に「大石主税刺鼠之図」で認められ、その後帝展に関係して委員となり、昭和十八年「山鹿素行先生」で帝国芸術院賞をうけた。ことに歴史人物画をよくし、その気品の高さをたかく評価されている。昭和十八年七月六日、七十六歳で歿した。）

三、  
繪  
画



### 三、絵画

#### 一、山文字に田舎風景の画幅 一幅

田安斉匡 紙本墨書 三二・五×五一  
箱裏書「明治二十三年六月二日鍋島筆姫様御附女中瀬澤ヨリ献呈之」

#### 一、鍾馗図 一幅

狩野元昭 紙本墨書 一一一×四四

(元和元年福井藩の絵師狩野了之の嫡男として生まれた。通称九郎次郎、了海と号す。幼少より父了之に学び、のち狩野法眼安信に入門し、第四代藩主松平光通より二百石を給わる。天和元年五十九歳にて歿す。)

#### 一、若竹の図 一幅

岡部南嶽 絹本墨書 一二六×三六・五

(享保十八年十月福井に生まれる。幼名は長十郎、内記、右膳、左膳とも称した。貞起、南嶽と号す。明和六年藩の家老職となり、千五百石の家督を相続、書画を好んだが特に墨竹を描くのを得意とした。寛政十二年四月十九日江戸に於て六十八歳で歿す。)

#### 一、人物漫画 一幅

中村西溪 紙本着色 一二八×三三・五

(寛政四年敦賀郡谷口村造酒業井筒屋忠兵衛の二男に生まれる。名は元矩、字は子文、十四歳の時、絵を学ぶため京都松村景文の門に入る。花鳥に長じ、虫類を描く妙手である。弘化二年歿。)

#### 一、鶴亀・松竹梅の図 一幅

中村西溪 絹本着色 一一六×四七・五

#### 一、小野玄信肖像画並びに小伝 一幅

伊星隻岳 小伝芳正大筆 紙本着色 九八・五×三〇

(隻岳は、名は星喩、通称は源助、字は元詮。坂井郡丸岡藩士であるが、実は大崎太郎右衛門の子。幼少より画を好み、遂に藩の画師となる。弘化四年九月歿す。)

一、福井藩十二ヶ月年中行事絵巻 一卷

筆者不詳 紙本着色 二五・五×三八八

(正月十四日桜門前馬威しの図、二月二十日三保島祭礼の図、三月九十九橋桃花の図、四月足羽川筏流の図、五月菖蒲打の図、六月祇園祭の図、七月盆踊りの図、八月鮎梁落の図、九月加茂山坂鳥の図、十月護摩堂紅葉の図、十一月献上寒鱈早駈の図、十二月舟橋雪景の図の月毎の行事が画かれている。今日そのほとんどもが廃絶し、また当時の風俗が慕ばれる等、貴重な史料である。)

一、牡丹図 一幅

徳川家慶 紙本着色 三四×五四

松平春嶽自筆箱裏書「嘉永年中松栄公御登城ノ節御拝領慶永拝領松栄公ヨリ頂戴 松平慶永謹記」

松平春嶽自筆軸裏書「松栄公御拝領 徳川家十二代將軍家慶公御筆 松平慶永謹記」

(松栄公とは、福井十四代藩主齊承公夫人浅姫のことで、將軍家齊公女。文政二年十一月二十九日婚姻。安政四年五月十日歿す。家慶は十二代將軍。嘉永六年歿す。)

一、日之出梅花図 一幅

徳川慶喜 紙本着色 一〇三×三九

一、油彩風景画 二面

徳川慶喜 油彩

①西洋風景画 四六・三×六六

松平春嶽自筆額裏書「徳川慶喜公真筆

It is the picture, which Sir Keiki Tocugawa sent by picturing himself, at last spring of third year of Meiji.]

②多摩川畔の写生 五一×八二

(慶喜自筆の油彩画としては、極めて珍しい作品であり、慶喜の多才振りを示す好史料である。)

一、柿本人麿肖像画並讃(付添書翰) 二幅

徳川斉昭・松平春嶽 絹本・紙本墨書 一二四・五×四二・五

徳川斉昭添書翰「如例春暖無御障大賀候。於營中中納言より御咄申候儀ニ付て心配可被下趣毎度忝存候。御一封直々中納言へ相届申候。奥よりも宜敷申進候様申聞候事ニ御座候。登城之節杯又々御咄申候半被察候。御答迄草々也。三月初二水隠士松越殿御□ニ白時氣為御尋籠中御投惠忝存候。何も御挨拶ニ可進品も無過日数書ニいたし候人麿之出来損有之如何敷人共一笑迄ニ懸御目候。不尽。」(安政三年三月、徳川斉昭が木筆を用いて描いた人麿の肖像画であり、斉昭から松平春嶽に贈ったものである。その折の斉昭自筆の添書翰。また安政三年四月末の松平春嶽自筆由緒書が付属しており、これらは別に一軸に合装してある。)

一、梅花図 一幅

花山院家厚 絹本着色 九四・五×四〇

松平春嶽直筆添書「花山院従一位前右大臣藤原家厚公御画 慶永記」

(花山院は代々清華の列に加わり、大臣大将の職を奉じて朝政輔翼に任ずる。慶応二年歿す。明治に至り侯爵家となる。)

一、梅に月の図並讃 一幅

鷹司輔熙画・近衛忠熙讃 絹本着色 九九×三六

(輔熙は幕末・明治初年の公卿。太政大臣・摂政鷹司政通の子。文化四年生、明治十一年歿。)

一、竹の図並讃 一幅

澤(清原)宣光画・蜂須賀斉裕(徳島十三代藩主)讃 絹本墨書 一一六×四三

(澤家は旧公卿家で、その祖は清原夏野の裔伏原宣幸の二男澤忠良に発しており、生野の義舉の総師に推

される等、幕末維新の激動に深く関連している。

一、難船ヲ見テ笑フノ図の巻軸 一巻

山内容堂 紙本墨書 三〇・五×二二七

(容堂が江戸湾で難船を見、その有様を戯画にして、春嶽に送ったもの。画中に「容堂先生難船を見て笑ふ図」「客ノ舟潮被引房州ノ方へ流行図」等と註書がある。)

一、竹石画折本 一帖

蒔田雲処 紙本墨書 一六・五×二二 厚一・四

松平春嶽自筆奥書「丁卯六月二十日 春嶽永観 (花押)」

(雲処は幼少より書画、詩作にすぐれ漢学者としても著名である。初め越前で代官を勤めたが、中傷する者があり、職を辞して大阪・京・江戸を転住した。晩年足羽山に住み病の為右手の自由を失い、左手のみで墨竹を描いた。慶応元年五十四歳で歿す。尚奥書に「丁卯」とあるのは慶応三年である。)

一、竹の図 一幅

土井有格 絹本墨書 一一六・五×三六・五

(名は有格、字を士恭、幾之助といい、松径、警牙と号した。津藩儒医土井篤敬の次子として文化十四年に生まれる。初め石川竹厓に学び、のち藩儒川村竹坡・斎藤拙堂に従学す。二十一歳で藩校有造館の助教となり、「資通通鑑」校訂の命を受け通鑑校刊総裁になり、明治二年督学に進む。彼は清朝の考証学を尊び、尊王佐幕思想の立場をとった。明治十三年六十四歳で歿す。尚この幅に松平春嶽の添書が二枚付属している。)

一、岩竹の図 一幅

江川坦庵 絹本着色 一一〇・五×四七

(坦庵は号で、名は英龍、字九淵、太郎左衛門と称す。早くより蘭学を修め、洋算測量、洋式練兵に通じ、米船の浦賀来港に際しては勘定吟味役格として幕府の海防の議に参画した。特に砲術家として知られ、砲

術教場を開いたり、伊豆国田方郡中村に大反射炉を築き、大小砲を鑄造するなどした。安政二年正月十六日五十五歳で歿す。

一、山水図 一幅

阿野公誠 絹本墨書 一二七×四四

(公誠は翠竹と号す。阿野家は三條実国の子公佐を初代とする堂上家である。公誠は公佐より数えて二十三代目にあたり、その子実允に至り子爵を授けられた。)

一、阿弥陀尊像 一幅

興正寺門主沢好 絹本着色 九三・五×四〇

(興正寺は真宗興正寺派の本山。元応二年了源が山科に一字を創し、本願寺三世覚如が興正寺と命名したのに始まる。のち存覚が仏光寺と改名したが、第一四世経豪は、当寺を弟経営にゆずり、蓮如の門に入り名を蓮教と改め、山科に一字を建立。これを興正寺と称した。明治九年に至り、本願寺派の所管を脱し独立、興正寺派を公称するに至った。画幅には「慶応丁卯林鐘十有三日 宰相越老侯光貴清談之餘索澤好写ニ佛像ニ後十有八日臨ニ清国沙門廣智者所ニ画弥陀尊像ニ以呈廣智嘗登ニ願描ニ阿弥陀佛尊影一千幅ニ悉異ニ其體ニ今所ニ臨者其第六百二十四尊敝寺所藏也 釋廣嚴薰手拝写(印)」の署名がある。慶応三年六月松平春嶽の求めに応じて、興正寺門主沢好が、かつて清の廣智の描いたところの阿弥陀尊像一千幅の内の第六百二十四番目を写して贈ったものである。)

一、墨梅図 一幅

長崎鉄翁 絹本墨書 一一四×四七

一、山水図 一幅

田能村小虎 紙本墨書 一二八×六三

(豊後・岡の人。幼名を三宮傳太といい、名は嶷、小虎散人・山樵・笠翁・青碗・飲茶庵主人と号す。九歳の時田能村竹田の門に入り、南画を学び、のち養子となる。また大坂に至り、経史を篠崎小竹に、武術

を大塩平八郎の門に学んだ。明治の初め画学校を創設する。明治四十年正月二十一日九十四歳で歿す。

一、桜花図並和歌讚 一幅

太田垣蓮月 紙本淡彩 一三〇×二九

讚「あすもきて みんと思へば 家づとに 手折もをしき 山ざくら花 蓮月」

（蓮月は幕末の歌人で、寛政三年に生まれ、明治八年に歿している。名は誠のぶといい、実父は伊賀上野の城主藤堂某である。生まれると同時に知恩院に仕えた太田垣光古てるひこに養われた。美貌聡明で幼少から和歌をよくくし、武技にも長じたが、子供や夫と死別する等家庭的に恵まれなかつた。彼女の歌は叙景歌にすぐれたものが多く、堂上風の気品と桂園風の清新とを兼ねそなえていた。）

一、鯉の画幅 一幅

市川徳行 紙本墨書 一二五・五×五二

（福井城下で福井藩士市川有右衛門光隆の子として生まれた。字は貫通、徳行・樵笛と号す。通称良右衛門。八石二人扶持金津の代官受込役で、性来画を好み、江戸に出て狩野園陵に入門。常に写生画を研究し、特に鯉を描くにおいては、市川の鯉といわれるほど好評を得た。天保六年五月十七日歿す。）

一、戯画の幅 二幅

高島夢蝶 紙本着色 一〇八×二六

（通称は甚五左衛門、夢蝶と号し、別に悟則齋の号があつた。家は福井藩居合の師藩家であつた。夢蝶は諸芸に達し、特に狂画は著名である。）

一、山中桜花の画幅 一幅

石垣東山 絹本着色 九八×三四・五

（敦賀の人、通称を東平と称し、角鹿東山又は角鹿石東等と号す。京都にて田中日華の門に入って絵を学び、円山派の絵をよくした。のち敦賀鞠山藩主酒井家に仕えていたが、藩主が大阪に定番勤務になったので、これに随従した。藩主が江戸に赴任後も東山は大阪に留り、絵を教授した。明治画壇の女流画家の跡

見花溪女史も門人の一人であり、中西浄心、岸田文吉なども同門である。敦賀にある時は柿谷半月に狂歌を学んだ。明治九年二月七十二歳で歿す。

一、桜花群禽の画幅 一幅

島田雪谷 紙本着色 一七一・五×九六

(文政十一年に生まれる。名は広意、通称範左衛門又は多可摩、字は樗園、雪谷又は青涯等と号した。家は代々福井藩士で、槍、劍、銃に通じ、また書道、絵画にも才能を顕した。初め画を岩尾雪峯に、のち長州の南州画家礪西涯に学び南北二派を兼修した。南画には青涯、北画には雪谷の号を用い、藩主松平春嶽・茂昭等の知遇を受け、遠近の門人千名を越すといわれた。明治十七年一月二十九日、五十七歳で歿す。)

一、山水の画幅 一幅

成見如山 紙本墨書 一三八×三〇

(福井藩士で、毛矢町に生まれる。画を谷口靄山に学んで、山水を得意とした。明治十七年歿す。)

一、「韓信股ぐぐりの図」外 人物画 三幅

早瀬来山 紙本着色 一二二・五×二九、一三六×六一

(文化五年福井に生まれ、画を松村景文、岡本豊彦等に学んだ。幼名は獻橘、のち鴻と改めた。初め晚翠、嫩僊、二石斎等と号したが、晩年来山に改めた。明治二十三年二月五日八十三歳で歿す。尚三幅の内、一幅に七十九翁 来山とあり、恐らくこれらは、この頃に描かれたものと思われる。)

一、山水の画幅 一幅

益子魯山 紙本着色 一三〇・六×三三

(魯山は、通称勘左衛門、魯山と号す。鯖江藩士で画法を須子焦石に学んだ。)

一、山水の画幅 一幅

西井魯溪 絹本着色 八七×五七・五

一、案聴抱琴の画幅 一幅

武内無声 紙本着色 一三五・五×五二・五

一、山水画 一幅

島田雪湖 紙本墨書 一七五×九六

(雪湖は、名は甫、雪附などと号した。福井藩士島田雪谷の長男として慶応元年に生まれた。墨仙の兄にあたる。初め弟墨仙と共に、福井に画塾を開いていたが、明治二十六年岡倉天心の招きで上京、美術学校で教鞭をとった。同二十三年、米国に渡りスタンフォード大学等で日本画を教授して名声を博し、自己の画域を大いに広める。三十八年日本美術学校の教授に就任のため帰国の途につき、同年十二月神戸港に帰着と同時に急死した。)

一、扇面群馬図 一握

島田墨仙 紙本墨書 扇全長二四

(慶応三年福井に生まれ、幼名を豊作といい、のち豊と改めた。幼時より絵を好み、はじめその父雪谷および橋本雅邦に師事したが、のち川崎千虎について学んだ。明治三十六年に開催された内国勸業博覧に出品した「大石主税刺鼠之図」で認められ、その後帝展に関係して、その委員となった。昭和十八年「山鹿素行先生」で帝国芸術院賞をうけた。ことに歴史人物画をよくし、その気品の高さをたかく評価されている。昭和十八年七十六歳で歿す。尚この扇面は昭和初期墨仙から松平慶民に贈ったもの。)

一、不老長春 一幅

河野菱渚 紙本着色 一三五・五×六〇

(弘化元年丹生郡本保村に生まれる。名は通兄、通称は條左衛門、菱渚または半湖と号した。南宗画を父通香に学び、明治二十三年京都画学校の教授となる。明治三十三年歿す。)



# 四、 拝領品

## 四、拝領品

### 一、扇子 三握

①白梅図扇子 一握 扇全長三〇・九

(十二代將軍家慶より拝領。)

松平春嶽自筆箱裏書「右御扇子は嘉永五壬子年三月十四日公方様吹上御庭へ被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>成候節、松栄院様此冬神田橋失二子御本丸御恩留也二も御同道被<sub>レ</sub>入其節御帰り道大路通り辺にて御腰之御扇子御取遊し越前守へ遣し候様二との上意にて松栄院様より御渡し被<sub>レ</sub>遊候由、四月九日神田橋へ御引移之節松栄院様右云々御意にて載候事。  
源慶永謹書」

②梅花図扇子・菊枝図扇子 二握 扇全長三〇・五

(十五代將軍家慶より拝領。)

### 一、天賜御衣類 三領

①白地鳳凰紋御狩衣 一領 着丈一四六、衿一九〇

(慶応二年二月、孝明天皇より拝領。)

②浅黄御狩衣 一領 着丈一五三、衿二〇〇

(明治天皇より拝領。)

松平春嶽自筆箱裏書「慶応三年丁卯秋八月五日御暇参内之節、以傳奏日野大納言拝領。源慶永謹記

③白地御引直衣 一領 着丈二三〇、衿一九六

(明治天皇より拝領。)

松平春嶽自筆箱表書「天皇御衣 一領 冬御引直衣 明治五年壬申秋八月二十五日参朝之節 恩賜從徳大寺宮内卿授付 正二位松平慶永謹記」

### 一、天賜御扇子 十九握

①雪溪熊図扇子 一握 扇全長三三二

(付傳奏日野大納言口述書一通。孝明天皇より拝領。)

松平春嶽自筆箱裏書「慶応三年丁卯八月二十九日、伝奏日野大納言資宗卿、奉<sub>レ</sub>勅書翰相添御末広一本賜

臣慶永。慶永謹記」

②富嶽に馬上人物図・流水に松竹梅図・菖蒲刈り図扇子並下緒 三握一本 扇全長三三二・五

(慶応四年七月十二日、明治天皇より拝領。)

③瀧に人物図中啓 二握 扇全長三三三・五

箱裏書「明治元戊辰年 十二月十九日御歳暮<sub>ニ付</sub> 御頂戴。」

④紅梅白梅図中啓 一握 扇全長三三二

(明治三年正月四日拝領。)

⑤白牡丹に五色鳳凰図・五色夫婦鳳凰舞図扇子 二握 扇全長三三〇

松平春嶽筆包紙表書「明治九年八月十八日依<sub>レ</sub>召参内、以恩召被<sub>レ</sub>賜、宮内大壺受付。松平慶永手記。」

⑥泉春園筆雅楽図・土佐備前守筆支那武人図の扇子 二握 扇全長三三三・五

松平春嶽自筆箱書「慶応三年丁卯八月五日御暇参内之節、御狩衣<sub>ニ</sub>御添拝領。」

⑦金地彩色山水図・赤地金泥山岳図夏扇 二握 扇全長三三三・五

箱裏書「明治三庚午年四月三日御参朝、堀川侍従康親卿を以御拝領。」

⑧池中ひもろぎ並鳥居の間図・二老人図の中啓 二握 扇全長三三三・五、三一・五

⑨竹堂筆椿図・有章筆竹図・華陽筆韓信跨ぐり図扇子 三握 三〇・五

松平春嶽自筆包紙上書「慶応四年戊辰六月二十七日、以堀川新三位康隆卿<sub>近習</sub> 天賜 慶永」

⑩煙草花絵団扇 一握 長四一、幅二四

## 一、天賜御盃 十四枚

①菊花御紋付鳳凰花菱・桜花紅葉・菊花模様・瀬戸三ツ組酒盃 三枚 径九・八、九、七・五

箱裏書「壹 辛未年七月二十三日御頂戴。明治十五年三月二十八日寒香亭ニ於テ 拝領。」

②菊花御紋付鳳凰花菱模様瀬戸酒盃 一枚 径九・七

松平春嶽自筆箱書「明治二十年十月三十一日徳川家達公千駄ヶ谷村邸へ天皇陛下 御幸御晩餐御陪食ノ後、於御休憩所へ被レ召親ク御手自天盃ヲ賜フ、コレヲ子孫ニ伝フルナリ。」

③菊花御紋付鳳凰花・花丸模様瀬戸酒盃 二枚 径七・七

箱裏書「御盃花鳥模様 慶応四年戊辰八月二十四日、於良隅御馬見場、天前天酌賜レ之、同花丸模様 明治元年戊辰九月十六日賜レ之。」

④瀬戸寿盃 一枚 径九

松平春嶽自筆箱裏書「明治十八年乙酉二月九日山階二品晃親王七十ノ賀筵ヲ芝公園内紅葉館ニ開キ玉フ、皇族官吏余等ヲ招キ丁寧ナル懇遇ヲ受ク御手自ラ見賜寿盃ナリ。松平慶永謹記」

⑤菊花御紋付鳳凰模様瀬戸酒盃 一枚 径八

松平春嶽自筆箱書「天盃 明治十年五月八日御陪食御親手賜 正二位松平慶永謹記」

⑥菊花御紋付三ツ組銀盃付宮内省伝達書三枚 径一〇・五、一二、一三・五

箱裏書「明治六年皇居炎上金千円献納、為其賞 下賜於宮内省華族局 交付。明治十七年三月十日 正二位勲二等松平慶永」

⑦菊花御紋付鳳凰模様瀬戸酒盃 一枚 径七・五

松平春嶽自筆箱表書「明治十一年十月十六日青山御所被レ為レ召、皇后宮御酌 賜盃。松平慶永」

⑧朱漆地金泥芦ニ二羽鶴・秋草ニ虫模様酒盃 二枚 径(鶴)八・五、(虫)八・四

(それぞれ慶応四年閏四月二十日、同年八月十三日に明治天皇より拝領。)

## 一、天賜銘酒瓶 二瓶

(明治二年八月一日拝領のもので、カットグラス製、高二十九糎、幅十二糎ある。一瓶の正面に「砂糖泡盛」と墨書した名札がはりつけてある。)

一、天賜銅花瓶 三点

①象眼入銅花瓶 一對 高三五・五 口径一〇

松平春嶽自筆箱裏書「明治十四年十二月十三日徳川將軍禮典録全三十九卷<sup>キ</sup> 目録一卷図絵三冊編纂成功

<sup>ニ付</sup> 岩倉右大臣迄差出献上之処、十五年一月二十七日慶永伊達宗城池田茂政御陪食被<sup>レ</sup>仰付於御學問所<sup>ノ</sup> 叡

感之勅語有<sup>レ</sup>之、御親手該花瓶尅<sup>レ</sup>對下賜之命ヲ垂<sup>レ</sup>サセ給フ、此事ヲ記載シ子孫ニ示ス、永世ノ珍藏トナ

ス、聖恩ヲ忘ルルコトナカレ、慶永」

②花鳥模様銅花瓶 一点 高三四 口径一四

箱裏書「於<sup>ニ</sup>御學問所、御對面、有<sup>レ</sup>勅語<sup>（御中山書）</sup>、賜<sup>リ</sup>候事、日々參内苦勞ニ被<sup>レ</sup>恩食<sup>（御中山書）</sup>候、仍<sup>テ</sup>賜<sup>リ</sup>候事。」

一、天賜蘭染付茶碗 一個

口径六・一 高四 箱裏書「明治二<sup>ニ</sup> 巳年正月十五日、御馬場始之節、於<sup>ニ</sup>御馬見所、天酌ヲ以御頂戴。」

一、天賜御机掛 一枚

六六×八一（孝明天皇御手沢品で、濃綠色絹地に牡丹唐草模様。侍從岩倉具綱を介して下賜されたものである。）

一、天賜御服紗 一枚

三六・五×三七・五 松平春嶽自筆包紙上書「皇上御領御太刀服紗一。明治二年己巳六月十一日參朝以<sup>ニ</sup>思召<sup>（御中山書）</sup>賜<sup>リ</sup>候段、内弁事千種<sup>ニ</sup>三位有文卿より被<sup>レ</sup>伝。權中納言慶永」

（紫色絹地の表に鳳凰、裏に桐の図柄を染め抜いている。）

一、天賜御品 二十八点

①二葉葵文錦・三重襷地菊牡丹花丸文錦・桜花蝴蝶文錦懷中物 三点。二葉葵文錦・桜花蝴蝶文錦煙草入並煙管入 二組四点。袂落 二点。紙入 一点。菊花御紋付金泥唐草模様亀甲製小刀 一振。

箱裏書「明治二年己巳正月二十八日於<sup>ニ</sup>朝廷、御年玉トシテ御拝領。」

②市松模様舞鶴文錦懷中物、同煙草入、同煙管入 一組三点。銀煙管 一本。菊花御紋付瀬戸三ツ組酒盃

一組三点

箱裏書「慶応四年戊辰五月二十五日、於御学問書御対面有勅語（御書）、勅語 日々参内苦勞被惠食、依之賜り候事。」

③毛植白馬置物並小型洋式剣 二点

（いづれも松平春嶽嫡男、初代春嶽公記念文庫主の松平慶民が、嘉仁親王、後の大正天皇から、明治十九年七月・明治二十年四月の二度にわたり拝領したもの。）

④飛鶴文錦並竹雀文錦懐中物、同煙草入、同煙管入 二組六点。銀煙管 二本。

（それぞれ明治二年正月十二日・同十三日の二度にわたり、賢所にて御神樂御拝詰の際、拝領したものである。）

一、天賜御下緒 一条

（慶応四年六月九日拝領した、明治天皇御常用の御下緒である。）

一、繁菱地花丸蒔絵御料紙箱（蓋裏に梅月の蒔絵） 一箱

四一×三二、高一四・五 松平春嶽自筆箱表書「天保九年戊戌十一月二十三日慶永（主）從田安家・常磐橋邸

へ引移リ之朝、本丸江登城家齊公家慶公へ謁見之節広大院殿（家齊公）目見之折、直ニ親自賜レ余ニ是為永世宝距、今凡四十二年、追懐往事而不止。明治十一年戊寅十月十二日 正二位松平慶永書」

一、松鶴鹿図金蒔絵印籠 一個

い一斉久孝作 長八・八 幅四・七

（松平春嶽が、天保九年十一月二十三日養子として田安家より越前家へ引移りの朝、江戸城に初登城して將軍家齊に謁見、就封の御礼の挨拶をした際、拝領したものである。箱蓋裏に福井藩儒高野進の弘化四年丁未春二月付由緒書がある。）

一、御拝領御大切之御細工物 七十六点

松平春嶽自筆箱表書「御拝領御大切之御細工物 天保九年戊戌十一月二十三日慶永当家へ引移り、其日朝

登城<sup>（從平川口より大奥へ）</sup>家齊公家慶公謁見御手自拝領、大奥より預り。慶永手記。」

箱裏書「天保十亥年三月四日 熊谷小兵衛 前波忠兵衛 右兩人<sup>ニ</sup>御預<sup>ケ</sup>御品書入置候事。」

（前記印籠と同様、松平春嶽が田安家より越前家へ引移りの朝、江戸城大奥で拝領したものである。銀牡丹孔雀置物・銀花車・銀陣太鼓等銀製の細工物を中心に、水晶・鼈甲・象牙等を用いて、いずれも二、三厘内外の精巧な小細工物類が、一箱に収められている。十一歳で他家へ養子に入る春嶽への伯父將軍からの餞として贈られた玩具類で、当時の細工技術の粹を集めた優品である。）

一、日本赤十字社員章条例並社員章 一冊一個

日本赤十字社 条例冊子一八×二二 メダル径三

（日本赤十字社より授与。）

一、大日本帝国憲法発布記念章並授与之証 一個一枚

賞勳局 授与之証四〇・五×五二 メダル径二・九

（明治二十二年十一月二十九日授与。）

一、勲賞並勲記 五点

①勲一等旭日大綬章並勲記（付賞勳局通知書）

（明治二十二年五月二十九日授与。）

②勲二等旭日重光章並勲記

（明治十四年七月十六日授与。）

③勲三等旭日章

（勲二等旭日重光章の副章として授与されたもの。）

五、  
武  
具



## 五、武 具

松平春嶽所用刀劍並拵

### 一、太刀（白鞘入） 一口

銘 恒次 刃長二尺三寸四分

（天保九年十月、田安家より出て十一歳にして越前松平家を相続することとなつた春嶽が、同年十一月二十三日初登城して十二代將軍家慶に謁見、花丸蒔絵御料紙箱、小型銀細工玩具類などと共に拝領。恒次は鎌倉初期、備中青江派の名工であり、わずかに摺上げてある。）

### 一、刀（白鞘入） 一口

短冊銘 信国 刃長二尺二寸九分

（表 切刃造、二筋樋、鍔形梵字蓮花劍彫。裏 樋並びに添樋。信国は吉野時代、山城国の名工であり、大きく擡上げ短冊銘となっている。後記相州広正と大小をなす。）

### 一、脇差（白鞘入） 一口

銘 表 相州住広正 裏 宝徳元年十月日 刃長一尺一寸七分

（表 梵字。裏 梵字棒樋蓮花劍彫。福井十四代藩主松平齊承所用。広正は室町中期、相模国の名工である。前記信国と大小をなす。）

### 一、太刀（白鞘入） 一口

銘 康光 刃長二尺四寸五分

（表裏共 樋並びに添樋。福井十四代藩主松平齊承長子於義丸所用。康光は室町初期、備前国の名工。後記藤島陣脇差と大小をなす。）

### 一、脇差（白鞘入） 一口

無 銘 刃長一尺三寸五分

(福井十四代藩主松平斉承長子於義丸所用。室町中期の作刀と考えられ、古くより藤島陣脇差と称されている。前記康光と大小をなす。)

一、短刀(白鞘入) 一口

銘 国光 刃長八寸一分

(表 護摩箸。裏 棒樋。福井十三代藩主松平治好が將軍家より拝領。国光は鎌倉末期、相州の名工で、新藤五国光の名がある。)

一、脇差(白鞘入) 一口

銘(表裏) 製此刀之時、静修少自傍觀之大笑、予亦啞然蓋醉中兒戲耳、此日春寒風方属而梅花如雪焉。(中子棟) 鯨海醉侯。貝刃長一尺二寸七分

(山内容堂が自から鍛造、松平春嶽に贈呈したもの。)

一、大小拵 一組

① 鈕 二重金無垢。上具に葵紋透し彫。

② 鞘 鯉鱗包。替鞘二組。蛇皮包並びに石地塗青貝梵字入。

③ 柄 白鮫。縁頭四分一野瀑し。目貫 赤銅色絵独鈷並びに同洲浜。

④ 鐔 鉄無地、金銀三日月象眼。銘 越州住明珍吉久作 象眼記内作。

⑤ 鞘附属品 (大) 小柄 銀斜子地赤銅色絵観音 後藤程乗作。小刀 美濃介直胤作。(小) 小柄 金無垢地赤銅海老 磁石付。小刀 国房作。割筭 金斜子地。

(前記信国・広正の拵。)

一、太刀・脇差陣太刀拵 一組

① 鈕 二重金無垢。上具に葵紋透し彫。

② 鞘 栗色皮包。

③ 柄 鮫黒塗。縁頭 赤銅斜子地葵紋透し彫。目貫 俱利伽羅龍・金蜻蛉。

一、短刀合口拵

一口

① 鉏 二重金着せ台付。

② 鞘 黒蠟塗。

③ 柄 出し鮫柄(白)。目貫 赤銅菊。

④ 鞘付属品 小柄 赤銅斜子地金葵紋。小刀 寿命作。

(前記新藤五国光の拵。將軍家より拝領のもので、殿中や応接用の角合口拵である。小柄の葵紋は極めて古式で、徳川家伝来の名品である。)

その他

一、短刀(白鞘入)

一口

銘 表 宗有作 元治元年冬至 裏 おもひよこしまなし。刃長五寸九分。

(表 揖、裏 碓の彫物。中根雪江所用。幕臣大久保一翁が注文して作らせ、雪江に贈呈したもの。宗有は江戸末期の刀工。)

一、短刀合口拵

一口

① 鉏 銅金着せ。

② 鞘 カリン製魚尽。磁石入。鞘口 繩。栗形 樽。

③ 柄 金鮫。縁 角製繩。頭 蜻蛉。

④ 鞘付属品 小柄 紫檀製擢。銘 法橋雪斎。

(鞘全面に金象眼で次のような刻文がある。「石□刀彫物小子工夫ニ而已の怒ニも敵の怒ニも克と申意ニ而碓ト

揖<sup>トヲ</sup>為<sup>レ</sup>彫候事<sup>ニ</sup>候 雪江老兄 一翁完」 前記宗有の拵。

一、脇差（白鞘入） 一口

銘 表 南蛮鉄於武州江戸、裏 越前康継。 刃長一尺一寸一分。

（もと尾州徳川家蔵品。江戸初期、初代康継の作である。康継は通称下坂市左衛門、近江国坂田郡下坂村の人。関ヶ原の役後、福井藩祖結城秀康が越前に入るや、康継を合力米四十石をもってお抱え刀鍛冶とした。慶長十一、二年頃、家康・秀忠両將軍に召出され、江戸においても作刀し、家康から「康」を賜わり名を康継と改めた。また、自作の刀の中子に葵紋を切ることを許され、江戸と越前を往復しつつ両地で仕事をす。康継の鍛えた刀は、新刀随一の切味と称され、大業物として名高い。元和七年に歿し、福井城下桂林寺に葬られ、現在は同寺跡の宝永三丁目に五輪塔が復元されている。）

一、槍（白鞘入） 一口

無 銘 刃長九寸九分

（平三角大身。柄なし。室町末期、美濃政常の作品かと推定されている。）

一、刀 一口

銘 藤原国武 刃長二尺三寸五分

（打刀拵付き。江戸初期。）

一、刀（白鞘入） 一口

無 銘 刃長二尺二寸三分

一、衛府太刀拵 一口

（大正天皇即位の大典のため製作。初代春嶽公記念文庫主松平慶民佩用。）

松平春嶽所用具足

一、黄唐茶糸緘二枚胴具足 一領

一、骨牌札（カルタザネ） 畳具足 一領

（カルタ型の桐紋崩銀象眼鉄札並びに銀鍍金鉄札を鉄小鎖でつなぎ合わせた優品である。火器に対する防禦を考慮した実戦即応の甲冑で、主要部はすべて二重の備えが施され、特に胴部は右記鉄札の下に、桶側胴型式の厚い鉄胴が組みこまれていて、文武を奨励した春嶽の気風を偲ばせる遺品である。）

一、白系緞陣羽織 一領

（普通見られる羅紗などの布製の陣羽織とは異なり、牛皮を黒漆塗りにした大型の小札を白糸で緞あげ、陣羽織型にしたものである。）

一、仏国パリ軍装店製洋式馬具 一具

鞍裏銘 「HARNACHMENTS MILITAIRES

CAROLLE

Rue de la Jussienne 15 PARIS」

（仏公使ロッシユが徳川慶喜に献じたもので、慶応三年八月四日慶喜より兵庫開港に関する尽力の賞として、鎖付純金製時辰と共に松平春嶽に贈ったもの。）

六、日常手沢品

## 六、日常手沢品

### 一、青色釉角鉢型筆立 一個

五・五×九 高四・五 箱書「慶永様江大久保越中守様より被呈之」

(側面に辰砂をかけて景色を出してある。大久保越中守は一翁、石泉と号し、名は忠寛、字を三市郎という。従二位。幕府の世臣忠尚の子。志摩守、右近将監、伊勢守、越中守に叙せられ、維新後は静岡県参事、東京府知事、元老院議官を歴任、明治二十一年七月三十一日、七十二歳で歿した。)

### 一、文房具 七十点

#### ①筆 架 五点

① 島雪齊作 黒檀靈芝形筆架 一点 長一三・五 ② 島雪齊作 黒珊瑚筆架 一点 長一三 ③ 島雪齊作 黒檀觀音筆架 一点 長一五 ④ 島雪齊作 蓮花筆架 一点 長一七 ⑤ 蠟石花鳥彫筆架 一点 長一四 高七

#### ②筆 立 三点

① 黄銅筆立 一点 口径一 高八 ② 雪芝作 自然木筆立 一点 口径三×六・五 高一〇・五 ③ 紙製 漆塗花鳥彫筆立 一点 口径一〇 高一六・五

#### ③紫檀筆入 一点 三〇×一五 高一〇・五

#### ④筆・墨

明治天皇御用品拝領筆・周永字製唐墨等 全三十一點

#### ⑤硯 五点

① 紫瑞雲月硯並添書 二点 一・一×五・五 厚一・五、二〇・五×五八  
添書「明治十年一月 聖上雲飛<sup>ウネビ</sup> 御陵神武帝後月輪 御陵孝明帝 御参拝、夫ヨリ京都市幸慶永奉<sup>一奉</sup> 勅命  
「奉<sup>二</sup> 随行<sup>三</sup> 拜<sup>二</sup> 兩陵<sup>一</sup> 京都二駐在スル数月偶購<sup>一</sup> 求硯一個、有<sup>二</sup> 雲月号<sup>一</sup> 慶永雲飛之雲、後ノ月輪ノ月ヲ此号

トナシタラハ慶永此随行ノ記念トナスニ宜シ實ニ奇ト云ヘシ、コノ由縁ヲ茲ニ記載ス。明治十年二月於京  
都「源慶永(印)」

㊦ 羅沙張箱入懷中硯 一点 二一・五×一〇・五

㊧ 繪具用懷中硯 一点 銘秀氣 一九・五×一二・五

㊨ 蓋付硯 一点 一八・五×一一・五

㊩ 兔彫木硯 一点 一三・八×一〇・五

⑥ 矢 立 三点

㊪ 島雪齊作 葵紋付紫檀矢立 一点 長一九・五

㊫ 島雪齊作 雲龍彫墨壺付矢立 一点 長一八・五 口径一・五

㊬ 鉄小刀、鉄筆入懷中矢立 一点 八×二 高二・五

(越前第十四代齊承長女菊姫、真照院の遺物である。)

⑦ 松鶴蒔絵文台及硯箱 二点 (小型道具) 五・八×一三・四 高三、五×三・八 高一

(春嶽夫人、勇姫の所蔵品である。)

⑧ 唐紙切 二点

㊭ 銘直次 鉄製唐紙切 一点 長一四 ㊮ 象牙彫り唐紙切 一点 長二一・二 巾二・五

⑨ 文 鎮 四点

㊯ 銀象眼銅製文鎮 二点 〇・八×一・二 長一五・五 ㊺ 硝子文鎮 二点 径七 高二・五、径六・五

高二・二

⑩ 肉 池 三点

㊻ 硝子肉池 二点 径六 高三、径六・五 高三 ㊼ 陶器製唐人形模様肉池 一点 径六・五 高四

⑪ 硝子製インキ壺 二点 径七・五 高六・五、三・八×三・八 高五・五

⑫ その他 九点



一、仏具

九点

- ①銅製墨台 二点 径六・五 高四、径七 高二
- ㊦竹製洋尺 一点 一・五×二〇
- ㊧ペン先 一点 三・二
- ㊨青磁硯屏 一点 一〇・七×一一
- ㊩蓮形筆洗 一点 径一三 高七
- ㊪ドイツ製シャープペンシル 八本入一箱 七・五×二〇・八
- ㊫小算盤 一点 七×二一
- ㊬西洋算札 三六枚入一箱 九・五×四

①線香建 三点

- ㊭島雪齊作 伽羅木白衣観音線香建 一点 高五・五 巾四・五
- 銘「雪齊謹刀」

（伽羅木は香木の一種で、中国では奇南、奇藍ともいう。茶道では白檀、沈香とともに鑑賞され、伽羅は真の香と定められている。）

- ㊮島雪齊作 象牙雲龍彫線香建 一点 口径一・八 高二
- 銘「法橋雪齊謹刀」

- ㊯蓮形線香建 一点 台径一〇 高一七

②青磁香炉 一点 口径七 高五・五

③観音像 二体

- ㊰白檀観音像 一体 高二・五

由緒書「白檀木 此の古木者我が祖弘法大師帰朝せられし時取帰りて植置かせ給ふ由申傳へたる也 明治五年三月 土佐国安芸郡元村 西寺住有識」

- ㊱石製観音像 (木製台付) 高一四・五

④その他 三点

- ㊲木の実数珠 一点

（二十個一連で、中一個は波模様銅製である。十九個は木の実で、緒留となる母珠には釈迦仏が刻まれ、

他の珠には羅漢が刻まれている。

㊦竹製線香筒 一点 口径二・二 長三二

(梅と詩が刻まれ、「芳齊逸人刀」の銘がある。)

㊧真鍮折たたみローソク建 一点 高三二

### 一、手廻諸道具類 五十六点

①手鏡 一点 径一三 長二五・五 ②払子 一点 長三〇 ③老眼鏡(ケース付) 一点 巾一三

④福寿唐銅花入(台付) 一点 口径一・五 高一〇 ⑤紫檀丸形台 一点 径一 高二

⑥竹製茶筴 一点 二三・五×六・五

(岩に水仙、七言二句の讚がある。「郷雲刀」の銘がある。)

⑦貝殻化石置物 一点 巾一・五 高九・五 ⑧孔雀石置物 一点 巾一四 高八 ⑨岩に兔の置物(台

付) 一点 置物 巾六 高六、台 八×九・五 高五・五 ⑩桃置物 一点 巾一二・五 高七 ⑪岩石置

物(台付) 一点 巾一・五 高七 ⑫瑪璃緒メ 一本 長三二

⑬呼鈴 三点

⑭輪型呼鈴 二点 径七・五 厚三、径五 厚二 ㊦卓上呼鈴 一点 高九・五

⑮革胴乱 一点 一〇・五×一六 ⑯洋式蒔絵パイプ 一点 口径二・五 長八・五 ⑰卦木(算木)

六本一組 〇・九×〇・九×五・五

⑱柄鏡 一点 径七・五 長一三・三

銘「松岡豊後守藤原吉次」

(越前十三代治好正室定姫の遺物である。)

⑲机掛 一枚 ⑲黒柿茶筒 茶筴入 一点 六・五×六・五 高一四

⑳小物手廻り品 一箱

㊰亀甲梓虫眼鏡 ㊱刺繡長小袋(愛月女詩あり) ㊲清国人王暢齊所贈の翡翠玉 ㊳懐中鏡(外国製)

㊦ 小型肖像写真立 ㊧ アメリカ「ニヤガラ」の化石  
全二十四点在中

㉑ 錫薬入 三個 二・二×一・八 厚〇・八 ㉒ 水 呑（椰子の実） 一点 一三×九 深五・五 ㉓ ロケ  
ット（時計鎖用 明治天皇・照憲皇太后の御写真在中） 一点 三×二・三 ㉔ 折たたみコップ 一点 口  
径六・五 深六・五

㉕ 雑品入り桐小箱 一箱

① 判彫 ㊲ 蒔絵筆 ㊳ 蒔絵小刀 ㊴ 鉛筆芯削 ㊵ 葵紋根付 ㊶ 折たたみナイフ 全十一点在中

㉖ カフスボタン 一組

㉗ 小 物 二箱

① 十一点在中小箱 薬入 小形財布 体育メダル 緒メ金具 木製細工玩具 ㊲ 四点在中小箱 七ツ道具  
（但し、現在五件のみ） 濃紅色革表紙小型洋式手帳及び予備紙 朝顔根付

㉘ 錦袋入り蛇長石 一個 二・五×一 ㉙ 陶器製七福人 七個一組 高四・五 ㉚ 銀涛模様煙管並黒色鞘  
二点 長二〇・五、長二三・五 ㉛ 小型植木鉢 五点 径三・五 高二 ㉜ 島雪齊作 黒柿吸殻はたき 一  
点 六×五

㉝ 黒 石（丸形に三日月）並由緒書 二点 四・五×四・八・一三×一七・五

（福井藩の持船晨風丸の乗組員が蝦夷より持帰り献上したもの。）

㉞ 西洋燧道具 一点 長二八

㉟ 犀角盃並添書 二点 一一・三×六・七、二一×六七

添書「此犀盃也 乃宋以前物重犀角者犀能避毒酒有<sub>レ</sub>毒則沸涌 故貴<sub>レ</sub>之其有<sub>二</sub>白紋<sub>一</sub>直上者曰通天犀辟  
<sub>レ</sub>塵分<sub>レ</sub>水盖寶物也 光緒己卯三月十二日姚江沈文煢記」

（光緒己卯は光緒五年で、明治十二年に当る。）

㊿ 紫檀小台 一点 径一三 高四・五

③7 銀煙管 一本 長二二・五

(徳川慶喜から拝領したもの。)

③8 紫檀虫除笄 一本 長二一

③9 手拭 一枚 三九×三四

(松平春嶽が染めたもので、蘭と「仿馬湘蘭法 薰風送清香 春何有郷人写主(印)」の語句が染めこまれている。)

④0 太政官印鑑小幅 一幅 一二・六×九・六 ④1 写真入れ 四点 九・六×八・五 厚二・二、九・六×

八・五 厚二、一二×九・四 厚二、一二・五×一〇 厚二・三

一、錠付手文庫 一箱

二三・五×一三・五 高一二・五

一、提御用箱 一箱

三七×二三・五 高二五

(葵紋が散らしてあり、三段の引出し付で、最上段は硯箱になっている。)

七、  
諸道具

## 七、諸道具

### 一、香盆 一枚

三二・五×二二 高二・五（福井第十三代藩主治好の夫人、麗照夫人―田安中納言宗武女定姫―の手沢品である。材質は紫檀で、中は古代裂が貼ってあり、縁には金泥で若松が描かれている。松平春嶽自筆の萬延元年九月付の由緒箱書がある。）

### 一、松栄尼遺品 二箱

（松栄尼は將軍家齊女浅姫で福井第十四代藩主齊承夫人である。本遺品十数点の内の主なものとしては紙入、煙草入、筆、茶碗、望遠鏡等がある。この望遠鏡の筒は紙製で、その上に漆を塗って作られたものであり、極めて精巧にできている。）

### 一、青松院遺品 一箱

（青松院は松平春嶽の生母である。遺品は増補仙台萩 写本 五冊・柳荒美談 写本 前五冊・同後四冊・白狐伝 写本 二冊・東照神君御書之写 一冊・徳馨録三玄公御病状日記 一冊・柳宮婦女傳略 一冊・写しもの 一冊・和歌帳 一冊・泰平御江戸往来 一冊・和歌帳 一冊・茶表紙未記入の帳 一冊・日光山陪従私記 一冊・江戸名所方角書 一冊・菅丞相御遺訓状 一冊、の二十七冊ほか手作りの栞等十五点がある。書籍の表紙等には越前和紙特有の墨流しや水玉、飛雲、打雲等が使われており、崇美である。なおこれらが収納されているカバンは春嶽常用のものである。）

### 一、提重 一箱

二五×四〇 高四三（雀模様朱盃 二ヶ・角小皿 十枚・徳利台 一ヶ・徳利 二本・四つ重ね重箱 一重・角盆 一枚等が組込まれている。村梨子地に芙蓉鳥の蒔絵がほどこされ、気品が高い。）

### 一、石帯 一筋

幅四・五 長一二六（束帯を着けた時、袍の腰にまとう帯で、松平春嶽が着用したものである。黒漆革に

葵紋を彫った蠟石で飾られている。装飾は蠟石のほか玉・瑪瑙・犀角などが用いられ、有文のものとは無文のものがあり、それぞれ官位の高下、儀式の軽重によって着用を別にした。

一、笏

四種

長四一・五、四三・五、四四、四一（松平春嶽が所用したものであり、一位の木で作られている。四種の中の一センチの笏は明治天皇の笏の残木で作られたものと伝えられる。）

一、桧扇

一握

長三三・六（松平春嶽が所用したもので、葵紋が刻まれている。）

一、懷中物類

十点

①懷中物（金地に竹雀模様他一点）一五×二一・五 ②烟草入・烟管入（金地に竹模様他二組）七×一二・五、長二五・五 ③提烟草入 一点 六・八×一二・五 長二四・五 ④官服用紙入 三点 一二×二五（松平春嶽所用。由緒詳細は不明。）

一、煙草盆

一箱

二一×一二 高八 箱書「文久二年九月三日 濱御庭之公方様 被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>成候節、中将様御同所ニ被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>入候而御拝領被<sub>レ</sub>遊候御品ニ候間御大切ニ取扱候様被<sub>レ</sub>申聞候事」

（黒塗黒羅紗覆、煙管、灰落、火打石、火縄等が在中）

一、短冊入

二箱

三九・五×九 厚四・五、三九×九 厚二 箱書「飛驒国位山一位木製 短冊箱 井手今滋所贈 春嶽

藏」

添書「記 飛驒国位山産一位木

一 短冊箱

職工

飛驒高山名工

内閣博覧会  
賞牌ヲ受 鳳紋

津田定之助

画工

同

国同所 田中大秀係田中稻香

画ハ飛驒国位山ノ遠景及ヒ同国有名ノ籠ノ渡リノ図」

（井手今滋は橘曙覧の子息である。もう一点の短冊入は表に松平春嶽自筆の竹の図が描かれている。）

一、酒盃

七個

- ①大 松に巖と鶴模様 一個 径九 高三。中 波に千鳥模様 一個 径九 高二。小 宝珠玉模様 径八・五 高二。

箱書 表「御盃合三」

裏「文久四甲子正月十九日 京都二條 於「御城」御頂戴」

(大・中盃には梶川の銘があり、文久四年正月京都二條城にて使用したものである。)

- ②涛に龍模様 一個 径八・六 高二・二

箱書「弘化三年丙午四月二十八日 御入国御発程二付二十七日田安第江御暇乞ニ被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>入御吸物御酒出候節、一位様御酒其杯を殿様御差被<sub>レ</sub>遊候其節之御盃」

(箱書中に一位様とあるのは春嶽の父田安斉匡のことで、殿様とあるのは春嶽のことである。この盃は春嶽が十六歳で越前へ初入国するに先立って、実父斉匡を訪問した際の別盃である。なお、桃園斎の銘がある。)

- ③大 松に鶴模様 一個 径一〇・八 高三・五。中 竹に雀模様 一個 径九・七 高三。小 梅にうぐいす模様 一個 径八・五 高二・五。

(これらの盃は春嶽の手沢品である。明治二年十月十日付で鈴木準道謹書の由緒書がついている。)

## 一、時計

七個

- ①舶来クロノメーター 一個 一七・五×一七 高一八・五

「Norris & C. 16 Soulk eastl st, River pool」

(明治初年のものと思われるが、現在もなお正確に作動する。)

- ②国産クロノメーター 一個 一五×一五 高一八・五

(舶来品を手本として国産化したもの。明治初か。)

- ③オルゴール付枕時計 一個 七×一一 高一三・二

箱書「家慶卿御拝領御枕時計 嘉永元年戊申四月二十八日慶永公江都より御国許に御発駕に付神田橋御



邸浅姫君様へ御暇乞に被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>入、夫より直ちに御筈駕に相成り神田橋御門外迄御立の処、俄に浅姫君様御用にて御呼戻に付御立ち帰之処、家慶卿御思召に御拝領之旨浅姫君様より御傳に相成る、御秘蔵器也。  
奉命 鈴木準道謹書」

(家慶は徳川十三代將軍。浅姫は第十二代家斉將軍の息女で、越前第十四代斉承の夫人である。)

④ 懐中時計 四個

① 金時計 一個 径四・六 ② 銀時計 三個 径四・八、径四・二、径四・六

(いずれも松平春嶽所用のもので、明治初期の舶来品である。)

一、時計附屬品 三点

① 懐中時計掛 二点 径一三 高一六、径八 高五五 ② 懐中時計ひも 一本 長四一 ③ 銀製瓢箪飾 一個 長三・七

(いずれも松平春嶽所用のもの。)

一、科学器械 二十一点

① 方位測定機 一点 径一三・五

(明治初期の舶来品である。)

② 気圧計 一点 径一七 高五・五

「明治五壬申年春 大野規周造」

(明治五年、大野規周によって造られた国産品で、気圧の高低によって大嵐、大雨、風雨、陰晴、好日、朗晴、乾天の文字が計器面に刻まれている。)

③ 正午盤 二点 三×六 高五、七×八 高一・八

(いずれも舶来品で、携帯用になっている。)

④ バロメーター 一点 径四・五 厚一・五

(明治初期、英国製の気圧計である。)

⑤寒暖計 一点 三四・五×六

「明治二己巳年春 於工作方局造之」

(明治二年の国産であり、国産寒暖計としては、極めて早い時期に属するものである。)

⑥顕微鏡 一点 径四 高四・五 ⑦望遠鏡 二点 径三・五 長一七・五、径四 長一六

⑧秤 一点 長一九

(木製のしゃもじ型容器に入っており、秤容器の裏に「未五分 元三文目」と記されている。)

⑨磁針付暦 一点 径六 高六・五

銘「芳明(花押)」

(円筒状で四段に別れ、盤面に「當針北其景知其時」と刻まれた日時計、陰暦の各日の月のみちかけと潮の満潮、引潮の時刻を計る盤、磁石のほか、全てで六種の器具が一体に組合わされている。)

⑩西洋秤 一点 長一五・五、皿 径三 ⑪磁石 一点 七×七

⑫物指 三点

⑬直尺 二点 二×二四 ⑭ノギス型物指 一点 長一八・五 幅九・五

⑬換算用竹尺 一本 三×三一

(竹を二枚張にしたもので、表裏にレイン尺、アムステル尺、フランス尺、エンギリス尺、アメリカ尺、曲尺、町間等が刻まれており、一目で他の尺法に換算しうるように工夫されている。)

⑭角度計 一点 九・五×九・五

(真鍮製で、砲撃の際、砲身の仰角を計るのに使われた。)

⑮舶来寒暖計 一本 長三〇 ⑯双眼鏡 一点 縦九 幅一一・五 ⑰小形折たたみ式虫眼鏡 一点 一・五×一・五 高二

### 一、携帯用茶道具 一箱

一五×二一 高三三(茶碗 一個・棗 一個・茶杓 一本・茶筌 二本・茶筌筒 一本・柄杓 一本が入

っている。)

一、紫檀提煙草盆 一箱

二〇×二三 高一三・五(硯・火箸・墨・筆・水差等十三点が入っている。)

一、書見台

一基

二四・五×三六・五 奥行二四・五(桐で作られている。橋本左内所用。昭和十年橋本家より「春嶽公記念文庫」に移管されたものである。)

一、書物挾板

二枚

二七・五×一九 厚一 表「積理」 裏「心正而後事可理理明而後心可正講学而後理可明」

表「集義」 裏「光明正大疎暢洞達如青天白日如高山大川如雷霆之為威而雨露之為澤如龍虎之為猛而麟鳳之為祥磊々落落纖芥無可疑者必君子也」

(橋本左内常用の挾板で、板面表裏に右の左内墨書がある。)

一、硯箱

一箱

二六・八×一四・二 高一五・一(安政五年七月松平春嶽より橋本左内に下賜したもので、引出中には当時のまま小判二枚が収められている。これは拝領以来、長く橋本家に蔵されていたが、昭和十年「春嶽公記念文庫」に移管されたものである。)

一、上 下

二領

①長上下 一領

(麻製で、葵紋付小紋縹色。松平春嶽着用のもので、春嶽より橋本左内に下賜したもので、のち橋本家より「春嶽公記念文庫」に移管されたものである。)

②半上下 一領

(麻製で、葵紋付小紋縹色。松平春嶽着用のもので、春嶽より橋本左内に下賜したもので、のち橋本家より「春嶽公記念文庫」に移管する。)

一、麝香包み 一包

(たとう) 六×三(袋) 四・五×八・五(松平春嶽より獄中の橋本左内に下賜したもので、麝香は鉛箔に包み、これをたとうに入れさらに布製袋に収めてある。橋本左内は、これを獄中より安政六年九月二十八日付の書簡を添えて母に贈っている。本品は、のち橋本家より「春嶽公記念文庫」に移管された。前記書簡は福井市加藤二一氏より本館に寄託され、その全文が「橋本景岳全集」下巻に掲載されている。)

一、山水金蒔絵印籠 一個

高一〇 幅五・六 箱書「文久二年壬戌十二月十四日横井平四郎同道尾州市ケ谷邸へ参上候節、於御馬見所前重相公慶恕君拝謁被仰付 御懇之御意之上御提ケ被為在候者御手自被下之 但平四郎へハ御硯一被下之」

(根付は象牙鹿の蒔絵、緒メは象牙菊彫である。文久二年二月十四日、中根雪江が横井小楠と共に江戸市ケ谷尾張邸に赴いた際、尾張藩主徳川慶恕より拝領したものである。)

一、鈴型香炉 一個

徳川齊昭 陶製 径一一 高一四

(嘉永三年十月十六日、松平春嶽が齊昭より受贈したもの。黒楽焼で、つまみは玄武。底には齊昭の花押がある。蓋には星座が二種描かれ、「建武二年 楠正成祭修具 乙亥正月元日」等の文字が刻まれている。)

一、自然石硯並山内容堂添書翰 一個・一幅

二六×二二、二四×三五・五 山内容堂書翰「越君嘗解得風流。咏月唵花互唱酬。拾来為贈海南石。此石能磨君墨不。贈春嶽兄以硯一枚賦此為副。吾洲所産而墨池不費人工所謂天然者。九十九洋外史」

(海南石は四国地方で採れる黒い石である。それを自然石のまま硯に見たてて山内容堂が松平春嶽に贈ったものである。)

一、百老竹彫刻置物 一個

島雪齋 竹 高二六・五 径一五

(松平春嶽の旧蔵で、雪齋の銘がある。雪齋は大工職島清治郎の三男として三国下西町に生まれた。初め当地の彫刻師志摩龍造の門に学び、のち加賀国大野の彫刻師弁吉に学んだ。また三国に来ていた長崎の篆刻師石齋について学び、石齋より齋の字を授けられ「雪齋」と号した。松平春嶽の知遇を受け御用職人となり、天皇、将軍、山内容堂、由利公正、中根雪江等にも作品を贈っている。三国惣社桜谷神社奉納神馬境内の木立神社の御神体松平春嶽公像も雪齋の作である。明治十二年六十歳で病歿す。)

春嶽公記念文庫解説目録  
— 什器編 —

昭和49年3月印刷

発行者 福井市立  
郷土歴史博物館  
(福井市足羽1丁目8-16)

印刷者 河和田印刷株式会社  
福井市一本木町88 TEL.☎3333(代)



昭和 49 年 3 月

福井市立郷土歴史博物館

